魔王の息子だが、勇者になる！

hate

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔王の息子だが、勇者になる！

【Ｎコード】
Ｎ４５９３Ｘ

【作者名】
ｈａｔｅ

【あらすじ】
俺は魔王の息子として生まれたが、そんなの関係ねえ！俺は、俺の思うがままに生きてやる！旅をして強く頼もしい仲間を集め、勇者になって魔族を撃退し、人間の世界で成り上がってやる。そうして、美しい姫かエルフ娘を嫁にして、一国の王になってやる！逆らう魔族は、もちろん皆殺しだ！

第1話　旅立ちの日

今朝の目覚めは、最悪だった。今日は記念すべき特別な日なので気持ちよく起きたかったというのに、部下の女達がベッドの中に潜り込んでいやがったんだ。おかげで口の周りとか、ちょっと人に言えない場所とかに女達の唾液がべっとりと付いてやがった。げっ、思い出すだけでも気持ち悪い。

もちろん、女達は漏れなくお仕置きをしておいた。しばらく俺に会えなくなるからという理由があったとはいえ、そんなの俺には関係ねえ。俺の爽やかな目覚めを奪った罪は重いからな。おまけに、返り血で俺の服を汚しやがったんだ。ますますもって許せねえ。頭に来たんで、半殺しにしておいたぜ。

顔以外はボコボコにしておいたが、あいつらが悪いんだからしょうがないだろう。もっとも、俺はこれから当分の間猫を被らなきゃならないんで、こんな暴力的なことはしばらくは出来ない。だから、ちょうどいい憂さ晴らしにはなったんだけどな。

「王子様、どうぞこちらへ」

俺が考え事をしながら魔王城の中をぼーっとしながら歩いていると、親父の部下が現れた。どうやら親父のところに案内してくれるらしい。自分の家の中ぐらい、案内されなくても大丈夫なんだが、まあいいだろう。俺は、そいつの後を付いていくことにした。

魔王の間に入ると、そこには大勢の魔族が集まっていた。魔人族、竜族、妖魔族、獣人族、半獣族の主だった連中がいた。１００人以上はいるな。まさか、俺のためにこんなに大勢の魔族、それも幹部連中が集まるとは、恐れ入ったぜ。

さすがの俺も、失礼になるから今被っている仮面を外そうかと考えたが、思いとどまった。それでは、常日頃から仮面を被っている意味がなくなってしまうからだ。魔族の連中に、顔を覚えられないようにと顔を隠してきた苦労が、水の泡になってしまうからな。

魔王の間は、相変わらず広い。今の魔王城の中で、最も広い部屋だ。２００人位、余裕で入るんじゃないか。ま、広いだけで豪華さには欠けるがな。もっとも、実用性は十分あるけどな。その点、人間の王の方が、実用性を無視して無駄に豪華にしそうだ。

親父、すなわち魔王は、魔王の間の奥にある一段と高い豪華な椅子に座っていた。相変わらず、強い魔力と威圧感を感じる。小さい頃は見ただけで怖かったが、さすがに今はもう慣れたのでなんともない。

俺は、まっすぐ親父の方に向かって歩いていく。そして１０メートルほどの距離まで近づくと立ち止まり、片膝を付いて恭しく一礼する。公式の場では、親子といえども公私のけじめをつけなければならないから、どうしても仰々しくなってしまう。だが、こればっかりはしょうがないだろうな。

「父上、私のわがままを認めていただき、ありがとうございます。

これから私は人間どもの国々を滅ぼすために、旅に出ようと思います。長い間留守にいたしますが、よろしくお願いします」

俺は、なんとも言えない気分だった。人間どもの国を滅ばすために敵情視察をしたい、という名目で旅をすることが認められたのがつい先日のこと。長い間の苦労が実って、ようやく自由に旅をするところまでこぎ付けられたんだ。思えば、ここまでの道のりは長かったな。だが、苦難の日々は今日で終わる。これからは、俺は思い通りに生きるんだ。

そう、誰にも言っていないが、俺は勇者になりたいんだ。そして、思うがままに冒険がしたいんだ。魔族なんて、野蛮で低脳な奴らとは今日でおさらばさ。俺は、俺の人生をやり直すんだ。

女だってそうだ。夜這いをかけて来る淫乱女達なんて、願い下げだ。清楚で奇麗な娘、凛々しくて美しい娘、安らぎを与えてくれる可愛い娘、そんな素敵な娘達と恋に落ちて、素晴らしい人生を送るんだ。

俺は、俺は、今日、この日をもって生まれ変わるんだ！

数日後、俺はとある島にいた。魔王城から召還魔法を何度も使って、たどり着いた。ここは、１０か所以上ある隠れ魔王子領の一つ。表面上は人間の国の領土だが、裏では俺の部下である魔族が支配している。だから、大抵のことは俺の思い通りになる。

今ではこういう島がたくさんあるので、非常に便利だ。何かあった

時には、この島の人間を使って俺の手助けをさせるつもりだ。俺自身は、魔族とは直接会うことはない。万が一にも、俺が魔族であると知られたくはないからだ。

俺は、この島の近くにある都市で仲間と落ち合って、旅をする予定だ。この日のために1年前から仲間探しをしていて、最近ようやく信頼できる仲間が見つかったからな。

「やあ、カイン。もう用意はいいのか？」

借家で旅支度をしていると、アントニウスがやって来た。こいつは美形のエルフで、剣士であるうえに魔法も使えるという便利な奴だ。身長は俺よりも少し低く、スリムな体型をしている。年齢は教えてくれないが、18歳くらいに見える。

「ああ、大体終わったところかな。そういうお前はどうなんだ？」

俺の荷造りは、ほとんど終わっていた。この島から持ち出すのは最低限の装備だし、それ以外は仲間と落ち合う予定の交易都市で購入するつもりだからな。

「俺も、とうの昔に荷造りは終わっている。良かったら、一緒に飯を食わないか？」

彼の誘いに、俺は乗ることにした。

彼と一緒に酒場に行くと、先客が待っていた。剣士のシモネッタと魔法使いのモニカだ。俺達が来ると思って、ここで待ち構えていたらしい。

「おう、やっと来たね。待ちくたびれたよ」

最初に口を開いたのはシモネッタ。アントニウスと同じ背丈の剣士だ。筋肉質な体格で胸は標準よりも大きめ、性格はさばけていて、下ネタも平気な女だ。美人とまではいかないが、そこそこ見れる顔をしている。中の上といったところか。

「本当に、遅いですよ」

次は、シモネッタよりも少し背が低いモニカ。スリムな体型に、シモネッタよりも更に大きな胸。人見知りする性格だが、慣れるとよくしゃべる。魔法も弓も使えるという、案外器用な女だ。顔も整っていて、美人と言うより可愛い顔といった感じ。上の下といったところか。

「いやあ、遅れて悪いな」

俺はそう言いつつ、シモネッタとモニカの胸をむんずと掴む。けらけらと笑って動じないシモネッタと、真っ赤になって怒るモニカの対比が面白い。

「あのな、カイン。そういうことは、これからはやめてくれよ」

アントニウスは頭を抱えるが、俺はやめるつもりはない。俺は、やりたいことは、自由にやりたいんだ。誰に迷惑をかけるわけでもな

し。えっ、女達に迷惑がかかるって？んなこたあない。彼女達も胸が大きくなるんだから、迷惑どころか有難いと思っているに違いないんだ。

こうして、この島で落ち合う予定の仲間は全て出会った。次の仲間に会うため、明日はこの島を出る。そして、俺の壮大な旅（になるに違いない旅）は、この日から始まるんだ。

第2話　出港と根回し

今朝の目覚めは、なかなかいい。両手がふかふかなものを掴んでいたからだ。ふかふかなもの、それは何か。それはズバリ、豊乳である。そう、俺は女を後ろから抱きしめつつ、両手で豊乳をしっかりと掴みながら眼が覚めたんだ。だから、目覚めが悪いはずがない。

「んー、また少し大きくなったみたいだな」

俺は胸の発育具合を確認するため、両手をモミモミした。するとあら不思議、幸せな気分になるじゃないですか。過去の偉人が、巨乳のことを『幸せ製造器』と呼んだという逸話を聞いたことがあるが、それは正に真理だろう。

ところが、そんな幸せな気分に浸っていた俺の邪魔をする、無粋な人間がいた。まったくもってけしからん奴だ。懲らしめなければならないな。俺は更に激しくモミモミすることにした。

「んもー、いいかげんにやめてくださいよー。カインのドスケベ！」

モニカが抗議するが、俺は取り合わない。

「ああ、これはなんとも良い夢だな。夢よ、頼むから覚めないでくれ」

あくまでも、寝ぼけているというスタンスを崩さない俺に、モニカは呆れている。盛んにやめてと言うが、俺は意に介さない。彼女が実力行使をしないことをいいことに、俺の幸せタイムはそれから3

0分は続く。

朝食は、近所の宿屋で済ますことになった。大抵の宿屋は、金さえ払えば朝食を提供してくれるので、今日引き払う借家で朝食を作るよりは良い選択だろう。

「んもー、カインはボクの胸を揉みすぎですよ。ボクのことを好きでも恋人でもないのに、そういうことはやめてくださいよー」

モニカは、頬を膨らませて不機嫌そうだ。

「はははっ、そりゃあモニカの言うとおりだ」

そんな怒った顔のモニカが可愛いのか、シモネッタはけらけら笑う。だが、好きだったらいいのか？どうも、そう聞こえてしまう。まあ、俺の勘違いだろうがな。

アントニウスは苦笑するのみだ。もう、諦めているのだろう。なんたって、俺は酒を飲むと手近な女を素っ裸にひん剥いて、後ろから抱きついて寝るからな。もっともそれ以上のことまで至らないので、大抵の女は許してくれるが。

「モニカが喜んでいるのは、言われなくても分かっている。そんなことより、船の出港時間が迫っている。早く食べてここを出よう」

珍しく俺が正論を言ったせいか、それ以降みんなは黙々と食事を済

ます。モニカも何か言いたそうだったが、結局黙って食べ続けた。

船に乗り遅れるというアクシデントは幸いなことに起きず、俺達は余裕で出港時間に間に合った。ここからは、情報交換の時間だ。

「それじゃあ、お互いの情報を言い合おうか」

そう言いつつ、俺は最初にモニカを指名した。次にシモネッタ、アントニウス、俺の順に情報を教え合う。

今、巷で最も噂になっているのは、もうすぐ魔王軍が帝国の東の首都目指して攻めてくるというものだ。

我々が暮らしているロマヌム帝国は、マレノストルム海という最大幅が東西２０００ミッレ・パッスース、南北１０００ミッレ・パッスースの広大で複雑な形をした内海を囲むようにして成り立っていたが、２０年前に魔王軍の侵攻を受けて以来、領土の縮小が続いていた。

ちなみに成人男性の足のサイズが１ペース、その５倍が１パッススになる。で、５０００ペースにあたるのがミッレ・パッスースといえば、内海の広大さがわかるだろう。東西の長さは、靴を１千万個並べた長さにもなるということだ。

魔王軍は２０年前、それまで数百年以上動かなかった東の国境線を

越えて突然攻め込んできて、瞬く間にペトラエアをはじめとする３つの属州を占領した後、一部は東の大国であるドロス帝国に攻め入った。

残りはマレノストルム海の南沿岸に攻め込んで、このエリアは２０年の間に魔王軍にほぼ征服されている。この南エリアは帝国領の１割以上を占めていて、帝国の穀倉である皇帝私領と５つの属州が失われた。

一方、ドロス帝国に攻め入った魔王軍だが、５年経ってから再びロマヌム帝国に攻め入り、５年で８つの属州を征服した。その間に東の都ビザンティウムと目と鼻の先まで来たのだが、ここに細長い海峡があったことから、海峡を渡らずに迂回していったため東の首都は無事だった。だが、この東エリアは帝国の２割以上を占めているうえ、幾つかの穀倉地帯を含んでいたため、帝国の被害は甚大だった。

それから魔王軍は再びドロス帝国に攻め入り、一部は北を目指して遊牧民の国家に攻め入った。それが１０年前のこと。その後魔王軍は、ポントスという広大な内海を左回りに進み、着々と近隣諸国の征服を進め、今年中に帝国の北東から攻め入る勢いだというのだ。

「しかし、状況は思った以上に悪いね。２０年で帝国領の４割が失われているのか。このままじゃ、帝国はあと３０年すれば消えて無くなるかもしれないねえ」

シモネッタは、冒険者として活躍するどころじゃないかもと言ってため息をつく。

「ま、最悪島に戻ればいいだろ。島で魔王軍に攻められたところはないんだしさ。なんとかなるさ、きっと」

俺が暗い雰囲気を明るくしようと思って言うと、モニカが賛同する。

「魔王軍のことは、今のボクたちがいくら考えてもしょうがないですよ。それよりも、これからどうするのか、考えましょうよ。ボクは、できれば西に行きたいです。バエティカとか、ルシタニアとかどうですかね」

彼女は、帝国の西に行くことを提案する。だが、それは却下だ。

「いや、それは駄目だ。俺は、東か北に行くべきだと考えている。東に行って魔王軍のこの目で実際に見るか、北に行ってエルフの協力者を得るか、エリオ達の意見も聞かなきゃならないが、今はその線で動きたい」

俺が反対すると、モニカは真っ青になる。

「えーっ、魔王軍を見に行くんですかー。ボク、怖いですう。魔族は人間を食べちゃうって聞きますし」

怖がるモニカとは対照的に、アントニウスは俺の意見に前向きのようだ。

「北もいいが、一度魔王軍を見ておくのもいいかもしれないな。いずれは戦う相手だろうし」

うん、いいね。さすがアントニウスだ。こいつはエルフだから、魔王軍といずれは戦うということがわかっているようだ。

「魔王軍か。駆け出しの冒険者には、いささか荷が重いような気がするねえ。海路じゃなく、陸路でゆっくり仕事をしながら行くっていうんならいいかもしれないけどね」

シモネッタも、いきなり魔王軍と相対するのでなければ賛成してくれそうだ。

「まあ、正式決定はエリオ達の意見を聞いてからということでいいな」

モニカが不満そうな顔をしているが、こいつは胸さえ揉めば大抵のことは聞いてくれるから、賛成してくれたも同然だ。

こうして、魔王軍の行動を直接見たいと思っている俺は、慣れない根回しをするのだった。

第3話　カインの回想

俺は、ぼーっとしながら海を見ていた。船が次の目的地、交易都市であるマッスィリアに着くまでには、まだ時間があるからだ。マッスィリアは、属州ナルボネンスィスの交易の拠点であり、植民市として建設されてから千年以上も経つ、歴史の深い都市でもある。

ここで俺達は、仲間のエリオ達と落ち合う手はずになっている。有用な人材のスカウトも頼んでおいたので、もしかしたら新たな仲間を得ることになるかもしれない。エリオ達と合流するまでは、今のところ急いでやることがないので、俺はこれまでの苦難の日々を思い浮かべていた。

俺が魔王の息子として生まれた頃は、魔王軍は弱体化の一途をたどっていた。人間達との国境線は数百年も動かず、幾ら戦えども一向に勝利をつかめず、人間達の豊かな国土に攻め入ることが出来なかったからだ。

勝てなかった原因は明らかだった。兵士の絶対数が少なかったこと。弱兵であるオークが多かったこと。装備も貧弱どころか全く無かったこと。作戦や戦術を理解せず力押しだけで戦っていたこと。魔王領の大半を砂漠占めていて、食料や物資が圧倒的に足りなかったこと。他にも挙げればきりがないほどたくさんあった。

こんな無茶苦茶な悪条件下のうえに、ロマヌム帝国とドロス帝国という、人口が推定で5千万人を超える2つの大帝国と戦っていたんだ。勝てなかったどころか、むしろ魔族が滅ぼされなかったのが奇跡と言ってもいいほどに、状況は最悪だった。

思うに、魔族が滅ぼされなかった要因は2つ考えられる。一つは砂漠にあったと思う。魔王領は、魔族を滅ぼしてまで欲しい土地ではなかったということだ。仮に魔王領が肥沃な大地だったら、間違いなく奪われて、魔族は滅ぼされていただろうな。

もう一つは、2つの大帝国に接していたことにあったと思う。片方が魔王領の奥深く侵攻したら、背後をもう一つの帝国に衝かれる可能性があったので、両国共に魔王領まで攻め込むことをしなかったのだろう。人間達がみな仲良しでなくて助かった。

だが、その幸運もそう長くは続かなかったはずだ。何もせずに手をこまねいていたら、魔族は滅んでいたに違いない。そう思った俺は、魔王の息子に生まれた幸運を活かして、魔王領の改革に乗り出したんだ。

もっとも改革以前に、赤ん坊である俺の指示に魔族達を従わせるのに物凄く苦労した。その苦労を語ると小説が何冊も書けるほどに長いが、とりあえずそれは置いておく。

俺が最初に命じたのは、人間の国にむやみやたらと攻め入って、兵士の数を減らすような無謀な行為を全面的に禁止したことだった。いたずらに兵力や国力を浪費せず、富国強兵に全力を尽くすためだ。

戦いは数が物をいう。だから兵士を増やさなければならない。兵士を増やすには、子作りに励む魔族を増やす必要があり、必然的に戦いを無くすか減らす必要があったんだ。

数を増やすために、混血も増やした。なりふり構っている場合ではないからだ。魔人族、竜族やダークエルフは、通常子作りが出来るようになるまで３０年かかるので、子作り可能年齢が１５歳である混血を増やす必要性が特に高かったからだ。

嫌がる者が多い中、男女各２００人のダークエルフを半ば強制的に人間と子作りさせた結果、今ではハーフエルフが１０万人近くになった。魔人族も同じ位の数がいる。竜族は元が少ないので、まだ５千人前後だが。このときの苦労も半端じゃなかったな。思い出すだけで、目から滝のように汗が流れるぜ。

獣人族についても、ワーキャットやワーウルフだけ混血を増やした。両種族共に男女各１５０人から始めて、今では混血が各１５０万もいる。獣人族は子作り可能年齢が１０歳なので、増え方も尋常ではないんだな、これが。

兵士を増やすめどが立つと、次は食料の確保が必須となる。いくら数が増えても食べ物が無ければ、待っているのは飢餓だ。そんな事態は考えるだけでも恐ろしい。

そこで俺は、魔王領の砂漠を農地に変えるべく数々の試みを行った。その際たるものが、台風の召喚だ。遠くの地から台風を召喚することによって、砂漠に大雨を降らしたんだ。物凄い手間と魔力を使うので、台風を呼べたのは年に1回だけだったが、１０年かけて砂漠を緑に変えることに成功した。このときは、さすがにうれし涙を流

したっけ。

安定した食料供給が出来るようになるまで、更に5年の歳月を要したけれど、得たものは大きかった。ロマヌム帝国の穀倉地帯の、優に１０倍の広さを持つ広大な農地が手に入ったからだ。単純計算で、５億の人間を養えるだけの農地を手に入れることが出来たんだ。これで輸送手段さえ確保できれば、兵士は食うに困らなくなるというわけだ。

このような富国強兵と平行して力を入れたのが、魔王子領の拡大だ。表魔王子領として、魔王領の2倍もある大陸といってもいいほど大きな島と、魔王領の2割程度の大きさの島を選んで魔族を移住させた。表魔王子領では、魔族との混血を増やす目的で人間との共存を目指したため、ロマヌム帝国やドロス帝国から遠く離れた地を選んだ。ここには、妖魔族、魔人族、獣人族を移住させ、魔族と人間の混血を平和的な方法で増やしていった。

裏魔王子領として、大小４つの無人島に魔族を移住させた。このうち2つの大きな島には、竜族、半獣族、亜人族、魔獣族、海獣族を移住させた。小さい方の2つの島には、魔人族、妖魔族、獣人族を移住させた。後者には、将来的には人間を移住させるかもしれないと思ったので、比較的人間に近い魔族のみを移住させることにしたんだ。

これら表裏魔王子領が順調に発展していくなか、俺は人間の国にスパイを潜り込ませて様々な情報を集め、有益な情報や技術を魔王子領に与えて領地の発展に大きく寄与した。そういや、スパイ共がなかなか言うとおりに動かなくて困ったな。あ、また目から汗が流れ

そうだ。

そして、魔王子領を建設してから5年ほどして、人間の国を密かに支配下におくことにした。これを、隠し魔王子領と呼んでいる。最初のうちは失敗も多かったし、このときの苦労を語ると長編小説が書けるほどだが、とりあえず今はおいておく。

時には俺が発狂寸前になるほどのアクシデントを乗り越えたおかげで、今ではほぼ完全に領内を支配下に収めることが出来るようになった。今では、隠し魔王子領を足がかりにして、ロマヌム帝国とドロス帝国にかなりの影響力を行使出来るようになっている。実は、既に両帝国は支配したも同然の状態になっている。何故かと言うと、俺が金と食料を独占しているからだ。

隠し魔王子領から得た情報によって、人間にとっては金が重要であることを知ったため、配下の魔族に金の生産を命じ、その金を元手にして大商会を幾つか密かに傘下に収めた。その商会は急速に発展し、今では両帝国の経済を牛耳っているんだ。金貨の鋳造も俺の息がかかった商会が独占しているため、事実上俺に歯向かえる商会はない。

食料も似たような状況だ。ロマヌム帝国の穀倉を幾つも占領してきたので、帝国の食料生産能力はガタ落ちだ。普通に考えれば帝国内で食料生産すればいい話だが、そうはならなかった。俺が占領地の食料を隠し魔王子領を通じて、帝国各地に供給したからだ。

今では帝国の食料のうち、おそらく7割近くが占領地産となっているはずだ。俺の意思一つで食料の供給は止まるが、実際に食料供給が止まったら、帝国は崩壊するだろう。商会に食料を買占めさせた

後で実行すれば、帝国は飢餓地獄と化すだろう。そんなわけで、単に帝国を滅ぼそうと思えば、今でも可能な状態なんだ。今の俺は、実質的にロマヌム帝国の命運を握っていたりする。

とはいえ俺の目的は、新たな国家の建設なので、ロマヌム帝国には俺に都合の良いように衰退してもらい、都合の良い時に滅びてもらうつもりだ。あるいは、俺が帝国の皇帝になってもいい。可能性は極めて低いが、上手く立ち回れば案外本当に皇帝になれるかもしれない。

魔王子領に住む魔族は、皆俺に絶対の忠誠を誓っている。魔王軍の上層部も、俺の配下で固めている。だから配下を上手に操って、俺の描いた筋書き通りにロマヌム帝国には滅びてもらい、俺が建国する新国家が魔族を駆逐して強大な国家として君臨することになる。

俺は魔族を撃退した勇者として、末永く語り継がれることになるだろう。勇者カインの物語が、後世まで語り継がれると嬉しいな。

だが、そんな俺の夢は上手くいくのだろうか。俺は強い自信はあるのだが、一方で不安がどうしても拭えない。とはいえ、俺の旅は始まったばかりだ。しばらくは、純粋に旅を楽しむことにしよう。

第４話　エリオとトマス

それほど長くない船旅を終えて、俺達はマッスィリアに到着した。この港湾都市は、州都ナルボ・マルティウスに次ぐ、属州ナルボネンスィス第２の都市だと言われている。人口はどれくらいだろうか。小耳に挟んだ話では、州の人口がここ２０年で倍になり、３００万を超えたとか。そのうち２割が州都で１割がここだとすると、３０万は超えているかもしれないな。

しかし、流石は港町だ。たくさんの船が並んでいる。いろんな地方の船が来ているみたいで、種類も様々だ。ほとんどは商船のようだが、中には軍艦もある。

俺は砂漠で生まれ育ったせいか、海や船が珍しくて大好きだ。特に海はいつ見ても飽きないくらいだ。港もそうだ。特にここの港みたいに、多くの船が行き交う港は大好きだ。

「あのな、カイン。さっさと行くぞ」

俺が港を見渡していると、アントニウスの奴が急かしてきた。気のせいか、エルフ特有の耳がいつもより尖っているように見える。いけね、待ち合わせの時間まで、あまり無いのを忘れていたぜ。

「んもー、カインはいっつも遅いですよ」

「あはは、違いないね」

モニカとシモネッタも、俺のことを責めはじめた。モニカは口を尖

らせているが、ダークグリーンの眼が丸く開いているせいなのか、正直言ってあまり怖くない。シモネッタは、そもそもあまり怒っていないようだ。ちょっと大き目の胸を揺らして、けらけら笑っているし。とはいえ、ここでぐずぐずしててもしょうがない。

「はは、悪いな。じゃあ、エリオ達に会いに行くか」

俺は笑って歩き始めた。

「よお、久しぶりだな。有望な団員は集まったか？」

待ち合わせの酒場に行くと、昼間っからエリオとトマスが酒を飲んでいた。二人とも顔を真っ赤にして、なんだか機嫌が良さそうだ。どうして機嫌がいいんだろうか。何かいいことがあったのか。

奴らはここで新入り団員探しをしていたはずだから、機嫌がいいということは、素晴らしい人材を確保出来たからだという可能性が最も高そうだ。うん、これは、新入りの団員に期待出来るかもしれないな。

そうそう。エリオは、俺達の冒険者パーティーであるエリオ団の団長だ。で、副団長がアントニウス。ただし、それは表向きのこと。実際は、団の最高権力者は俺なのだ。まあ、理由はおいおいわかるだろう。

エリオは、俺と同じ位背が高くて、がっしりとした体格をしている。槍を持たせたら、敵無しとまで言われているほど強い槍戦士だ。短く刈り上げた金髪が、彼の精悍さを際立たせている。ダークグリーンの眼を大きく開けて笑うことが多い。とても頼りがいのある仲間だ。確か２０歳になったはずだ。

エリオと俺が最初に出会ったのは、確か1年ほど前になる。場所はシキリアという、マレノストルム海の中で最も大きい島だ。そこの酒場で奴が喧嘩をしていたんだが、多勢に無勢でボコボコにやられそうになったところに俺が加勢して、助けてやったんだ。

その時以来、奴は俺に恩義を感じたらしく、何かと手助けをしてくれるようになったんだ。そこで何度か酒を酌み交わしたりして仲良くなり、そのうちギルドで一緒に仕事を請け負うようにもなった。

そうしてある程度気心が知れた頃になってから、俺は自分の計画を奴に話したんだ。そう、冒険者パーティーを結成して、世界中を旅して回りたいという計画をだ。

奴は最初は驚いていたが、少し考えて幾つかの問題点を指摘した。端的に言うと金のことだ。旅を続けるには相応の金が必要だし、旅の途中で金を稼ぐことが出来なければ、最悪の場合飢え死にしてしまう。それ以前に旅をするには装備を調えなければならないが、それにもかなりの金が必要になるという。

そこで俺は本当のことを言うかどうか迷ったが、結局その場では結論を出さなかった。どうせ俺は自分が魔王の息子であることを隠しているのだし、嘘を言うことにためらいはない。とはいうものの、上手に嘘をつく必要があるので、少し時間を稼ぐことにしたんだ。

すると良い考えが浮かんだ。金持ちのスポンサーを見つけたが、スポンサーの意向は世界中に埋もれているであろう、魔王軍と戦うことが出来る人材を見つけ出すことだということにしたんだ。これならいずれ魔王軍と戦うという目標を掲げても、魔王軍と戦うための軍勢を組織するために動いても、辻褄は合うはずだ。

さすがに俺も、いきなり魔王軍と戦うために旅をしようなんていう、誰もがドン引きするような目的は言えなかったんだ。だから俺はエリオに対し、俺達の目的は魔王軍と戦うための人材発掘だと話し、奴の賛同を得ることに成功した。

こうして、俺とエリオは近いうちにエリオ団を結成し、世界を旅して回ることを誓い合ったんだ。だから、現在は人材発掘がエリオ団の目的ということになっている。

トマスは、俺やエリオよりもやや背が低く、筋肉質な体格をしている。剣の腕は一流で、滅多な奴には遅れをとらない。茶色の髪を短く刈り上げていて、エリオに劣らず精悍に見える。普段は無口で、緑の眼をしっかり見ていないと、感情が読み取れない。不言実行の人で、エリオとは違った意味で頼りになる。確か、１９歳のはずだ。

奴と出会ったのは、半年ほど前になるだろうか。場所は、ナルボネンスィスのはずれだったか。はぐれ魔族、確か亜人族のゴブリンに襲われて死に掛けていたところを、俺とエリオの二人がかりで助けたんだ。俺が神聖魔法で傷を癒さなければ、おそらく奴は仲間の後を追って死んでいただろう。

そんなことがあったせいか、奴は俺に対してエリオ以上に恩義を感

じたらしく、エリオ団の話をしたら直ぐに仲間に加わりたいと言ってくれた。こうして、俺は頼れる仲間を二人も得たというわけだ。

「みんな、元気そうでなによりだな」

俺がエリオやトマスとの出会いを思い出していたら、アントニウスもエリオとトマスに声をかけた。久々に仲間の無事な姿をみたせいか、アントニウスは嬉しそうだ。もっとも、奴らに何かが起こるとは思えないがな。だが、仲間との再会を喜ぶ男達とは違い、女共の思惑は多少違ったようだ。

「で、どうなんだ。有望な仲間は見つかったのかい」

「ボクも早く知りたいです」

なんて感じで、シモネッタとモニカは人材のスカウトが上手くいったのかを、早くも知りたがっている。まあ、気持ちは分かるんだけどな。だけど、そこまで急ぐことかというと、大いに疑問が残るんだが。

「まあ、そう急ぐな。夜には会わせてやるから。話はその時でいいだろう」

エリオはそう言ってはぐらかし、トマスは無言で頷きエリオに同調する。うん、これは何かあるのかな。別に隠す理由がなければ、ここで知っていることは教えてくれてもいいんじゃないかって思うけどな。話さないとなると、何か事情があるとしか思えないな。

「なんだい。そりゃ残念だね」

「んもー、早く知りたいのに意地悪ですよ」

エリオの態度に、シモネッタとモニカは不満そうだ。まあ、こいつらに気持ちも良く分かる。これから苦楽を共にする仲間になるかもしれないんだから、どういう奴なのか早く知りたいと思うのは当然だろうに。たとえ何か事情があったとしても、黙っていてもしょうがないと思うんだけどなあ。

「悪いが、それよりも急いで情報交換がしたいんだ。お互いに、知っている情報は全て出し合おうぜ」

そう言うなり急に真剣な表情になったエリオに、女達は渋々引き下がった。

第5話　装備品

「なるほどな。東方に行って魔王軍をこの目で見たいというのか。確かにそれもありだろうな」

エリオは、俺の提案にどうやら賛成してくれそうだ。エリオ団の表向きの目的は、魔王軍と戦うための人材発掘なのだから、肝心の魔王軍のことを知っておいた方がいいと思ったんだろう。

「俺は船で行ってもいいんだが、旅をしながらの方がいいっていう意見もあってな。陸路で行くのもありかなと思っている。ただ、陸路だと選択肢が多くてな。なかなか考えがまとまらないんだ」

話した後で俺は苦笑する。陸路の方は選択肢が多いのだが、俺には地理的な知識が無いために、どのルートがいいのか分からないんだ。それは多かれ少なかれ、この場の全員に言えることなんだが。

シモネッタとモニカは、生まれ育った島から出たことは少ないと言っているし、エリオは島育ちだし、トマスはナルボネンシスから出たことがあまり無い、アントニウスは北方の国出身。そうなると、恐ろしいことに俺が最も東方の地理に詳しいことになってしまう。

「それなら、思い切って北回りにするのもいいかもしれん。幸い、新入り候補が二人とも北方出身でな。新入りの話を聞いてから、もう一度話し合おう」

なんてエリオは言うが、何だと。新入り候補は二人なのか。それも北の国出身か。帝国出身でないのは気になるが、まあエリオ達が選

んだ奴らだ。多分大丈夫だろう。

「でもそうなると、装備の買い付けが出来ませんよ。どこに行くのかによって、必要な装備は変わりますからね」

モニカの言うことはもっともだ。だが、今回ばかりはちと違う。

「あー、モニカ。お前の言うことは間違ってはいないが、今回は事情がちょいと異なるんだ。既に主な装備については、購入の手配を済ませてあるんだ」

そう、今回は俺がかなり頑張って装備を用意しておいたんだ。しかもその多くは、行き先によって変わるようなものじゃない。もっとも、このことを知っているのはエリオとアントニウスだけなんだがな。

「えーっ、ちょっと待ってくださいよ。ボクだって、好きな装備を選ぶ権利があると思います。勝手に装備品を手配するなんて、ちょっと酷いと思います」

「そうだね。さすがに今回ばかりは、モニカの言い分の方が正しいんじゃないか。装備品は、自分の命に関わるんだよ。それを他人任せに出来ると、本気で思っているんじゃないだろうね」

おおっと。モニカだけでなく、シモネッタまで文句を言ってきたよ。なんだか雰囲気も悪くなっちゃったな。ここは早いとこ、事情を話すしかないか。

「ああ、シモネ。確かにあんたの言うとおりだが、ちょいと俺の話も聞いてくれ。俺は装備品の手配をしたが、それを無理に使えとは

言わない。だがな、文句を言うのは俺の話を聞いてからにした方がいいと思うぜ。それに、あんたの装備品については、エリオからの要望に基づいて手配しているんだぜ」

「なに、エリオの……　まあ、いいだろう。とにかく話を聞くよ。それでいいんだね」

エリオの名前を出したら、途端にシモネッタは大人しくなっちまった。こいつは、エリオに惚れているから、まあ当然の反応だろうな。ようし、聞いて驚くなよ。

「ではいいかな。最初にシモネの装備品だが、武器は銀の剣を用意した」

「なっ！」

おうおう、シモネッタめ。目を真ん丸くして驚いているよ。声も出ないほど驚いたっていうやつか。そりゃそうだよな。銀の剣なんて、滅多なことでは手に入らないからな。買うとバカ高いし。

「そして、兜は銀の兜」

「なにっ！」

「盾は、銀の盾」

「なぬっ！」

「最後に、銀の鎧」

「ぬおっ！」

「あ、でも他人任せには出来ないんだっけ。残念だが、シモネのために用意した装備は、新入りにあげるか」

俺が笑って言うと、シモネッタは俺に駆け寄って両手を握り締めた。

「いや、いい。カイン、私が悪かった。せっかくお前が選んでくれた装備だ。大事に使わせてもらうよ。だから、新入りにあげるなんて意地悪なこと、言わないでくれ」

あはは。シモネッタめ、真っ青な顔をしてやがる。そりゃそうだよな。こんな高い装備、田舎の冒険者には、逆立ちしたって用意できるはずがないもんな。間違いなく、シモネッタが買おうとしていた装備よりも数段良い品だろう。

「ん、そうか。まあ、欲しいって言うならあげてもいいが」

「うん、欲しい。欲しいったら欲しいよ」

彼女があまりにも真剣な表情で言うもんだから、思わず笑いそうになってしまった。

「なら、シモネにあげるよ」

「ありがとう。恩に着る」

なんと、彼女は涙を流して喜んでいる。うーん、ここまで喜ぶとは思わなかったな。やはり俺は、人間のことをあまり理解していないらしい。俺にとっては簡単に手に入る装備で、こんな反応が返って

くるなんて、予想できなかったからな。これはちょっと気前が良すぎたのかな。まあ、悲しむよりはマシだと思えばいいか。

俺がそうやって自己完結していると、モニカがぐいっと顔を近づけてきた。おいおい、お前近寄りすぎだぞ。それじゃあ、口と口がくっついちゃうだろうが。

「ねえ、カイン。ボクの装備は何なのかな。お・し・え・て」

モニカは、顔と顔がくっつきそうな距離まで近寄ってきた。あのなあ、いくら俺に惚れているからって、あまりにも露骨じゃないか。周りのみんなもドン引きするだろうが。

こいつは普段はツンツンしているくせに、たまにこうやってデレデレするんだよな。人間の女って、よくわからねえよな。こいつが普通なのか、それともそうじゃないのか、俺にはまだ理解できん。だがまあ、質問には答えてやるか。

「モニカの装備品だが、武器は銀の杖だ」

「やたっ！」

「加えて、銀の弓」

「よしっ！」

「帽子は銀の帽子」

「やりっ！」

「盾はなし」

「ははっ、そうだよね」

「最後は未定」

「へっ！ちょ、ちょっと、どういうことなんですか？」

最後のセリフに、モニカはずっこけそうになったが、なんとか持ちこたえて俺の肩を掴んで揺すりだした。

「ちょいと訳ありの品があってな。今はまだ、誰に渡すのか決めてないから言えないんだ」

俺がそう言い訳すると、モニカの奴、興奮して更に俺の肩を揺らしやがる。

「ええっ！言えないほど良い品があるんですか？それなら私にください！お願いしますよっ！」

「そうは言ってもな。優秀な新入りが入団したら、そっちに回した方がいいかもしれないだろ」

まあ、理屈で考えればそうだよな。だが、こいつには理屈が通じなかった。

「もしかして、新入りがボクよりも奇麗な女性だったら、その人にあげちゃうつもりじゃあ。もしそうだったら酷いですよ。入団試験のこと、忘れないでくださいよね。ボク、初めてなのに頑張って、いっ、三日三晩やられまくったんですからねっ！」

あはは、俺の魂胆バレバレか。でもいけね、素で入団試験のこと忘れてた。そういや俺、そのときにこいつを騙して、さんざん好き勝手したんだよな。

話はちょいとそれるが、エリオ団に入るには入団試験がある。主に戦闘や知識に関してのものだが、女性には特別試験がある。ぶっちゃけて言うと、男性経験の有無を調べる試験だ。男性経験が無い女だと、様々なデメリットがあるんで、お断りしているからなんだ。

一例を挙げると、レイプされて取り乱したり、精神異常をきたして最悪自殺しかけたりするのは未経験者が多い。他にも男に免疫が無くて、簡単に騙されたり。とにかく厄介なこと、このうえない。そこで、未経験者はお断りしているわけ。

それで、経験の有無を調べるために特別試験をするんだが、試験をしたらあら不思議。どういうわけか未経験者も経験者になってしまうんですね、これが。その特別試験を、俺はモニカを騙して1週間休まずに続けたんだ。モニカが騙されたと気付いた時には、時既に遅し。

ところが、モニカは騙されたことがよっぽど悔しかったのか、他人には1週間ではなくて3日だったことにして欲しいと頼み込んできた。俺もその方が都合が良かったんで、仲間はみんなモニカの特別試験は三日三晩だと思っている。それでも鬼畜だとかたまに言われるので、彼女の頼みを聞いて正解だったと思う。

彼女は、おそらく俺が騙したことを言っていると思うんだが、その点を言われたら返す言葉は無い。これは、俺の負けかな。そのうえ俺は、試験は原則1日であることや、女には相手を選ぶ自由がある

ことを話していない。色々と嘘をついているので、この話題は触れてほしくないよな。

「分かった、分かった。お前には、シルバーメイルをやるから。だから、入団試験のことは二度と言うなよ」

俺の返事を聞いて、モニカは大喜び。

「よっしゃあっ！シルバーメイル、いただきっ！」

女って、なんて現金なんだ。こいつ、ぴょんぴょん飛び跳ねて喜んでいるぜ。まあ、可愛いから許すけどな。まったく、人間って奴はよくわからないな。しかし、勇者になるには人間のことを良く知らないといけないだろうし、そもそもうっかり自分が人間でないことがバレてしまいかねない。

ふうっ。勇者への道のりは、まだまだ遠いようだ。

第5話　装備品（後書き）

惜しげもなく銀製の装備を仲間に配るカイン。金銭感覚が仲間と大きく乖離しているようです。
モニカは、見た目に反してかなりしたたかなようで。初体験をネタに、カインに対して高価な装備をねだります。なお、モニカがカインに惚れているというのは、あくまでカインの主観です。彼女がカインの財力に大きな魅力を感じている可能性は、否定できないでしょう。

第6話　ヘルガとネリー

夜になって、新入り候補も含めてエリオ団全員が集まった。ただ、あまり人に知られたくない話をするかもしれないので、酒場は避けて俺が借りている家に集まることにした。以前は商人の家族が住んでいたとかで、優に１０人以上は泊まることが出来る大きさの家だ。

その家の食堂にはしっかりとした造りをした長方形の大きなテーブルが置いてあり、近くの酒場から運び込んだ酒や食事が所狭しと置かれている。エリオが飲み食いしながら話そうといい、みんなが賛成した結果だ。

今、目の前には二人の新入り候補が座っているが、正直言って俺は驚いている。なんと、新入りは二人とも女だったんだ。これ以上女がいても役に立たないと思っていたので、エリオの選択には疑問は残る。

だが、エリオのことだから、何か理由があってこうなったのだろう。ここで反対してもいいんだが、それが原因で冒険に大きな支障が出ても困るので、俺はとりあえず様子見を決め込むことにした。

「では、紹介しよう。こちらがヘルガ、曲芸士だ」

食事や酒の用意が終わり、全員が席に着くと、エリオが新入りの紹介を始める。それに応えて、新入りは入団を認めてもらおうと精一杯自分の売込みを図るのだろう。

「アウストラシア王国出身のヘルガよ。得物はダガー、曲芸士をやっているわ。強行偵察から潜入まで、何でもございよ。是非みなさんの仲間にして欲しいわね」

最初に紹介されたのは、しなやかな豹のような印象を与える娘だ。金髪は、肩に届かないよう切り揃えてある。絶えず笑顔を浮かべているにも係わらず、ダークグリーンの眼は笑っておらず、一筋縄ではいかない女であることが伺える。

明らかに筋肉質とわかる体型は、曲芸士としての実力が高いのではないかという期待を抱かせる。胸はそう大きくはないが、激しい動きをする曲芸士ならば当然だろう。

顔は、中の上といったところか。顔はやや小さいが、鼻筋は通っている。小顔のせいか、身長が実際よりも高く見える。

「こちらがネリー、伝道士だ」

「みなさん、はじめまして。ネウストリア王国生まれのネリーです。神聖魔法の使い手ですので、みなさんが怪我などされたときは、精一杯治療をさせていただきます」

次に紹介されたのは、静かで大人しい良家の子女という印象の娘だ。こんなんで冒険者が務まるのか、ちょっと不安だが。彼女の奇麗で長い金髪は、背中まで伸びている。柔らかな笑みを浮かべており、品のある仕草などから見ても、これまであまり苦労しないで生きてきたように見える。

あまり筋肉が無いスレンダーな体型であるが、胸はモニカよりも大きい。さきほどからモニカが難しい顔をして、彼女の胸を睨みつけるようにして見つめているのが笑える。そんなに他人の胸の大きさが気になるもんなのかな。

顔は上の中で、モニカよりもワンランク上といったところ。どちらかというと子供っぽくて可愛いという印象を受けるモニカに対して、貴族の娘のような気品を備えて奇麗というのがネリーの印象かな。あまり冒険者らしくはないが、外見だけで判断していいものか迷うところだ。

「とまあ、自己紹介はここまでにしよう。今日は、新入り団員の歓迎会だからな。あとは飲み食いしながらゆっくりと話し合って、親睦を深めようじゃないか。ではみんな、食事を始めよう。乾杯の用意はいいかな」

エリオは、そう言いつつ杯を手に持っている。中身はワインだろう。俺は酒が好きな方ではないが、仕方がない。ここはエリオに従って飲むとしよう。

「「「「「「「乾杯！」」」」」」」

エリオの音頭で乾杯し、宴会が始まった。

宴会が進むうち、いつの間にかヘルガにトマスがすり寄っているのに気が付いた。ふうん、トマスはヘルガ狙いか。そこでネリーの方を見てみると、エリオがしきりに話しかけてる。エリオとは反対側にはシモネッタがいて、エリオをけん制しているようだ。俺は少し考えた後で、ヘルガの隣に移動した。

「よう、ヘルガ。楽しく飲んでるかい」

俺が声をかけると、彼女は赤い顔を俺に向けて微笑んだ。

「ええ、楽しく飲んでいるわよ。あなたがカインね。噂は聞いているわ」

彼女が俺の方を向くと、トマスが渋い顔をした。だが、そんなのは無視だ。

「アウストラシア王国出身なんて、珍しいな。今度ゆっくり、話を聞きたいところだ。それはさておき、特別試験のことは聞いているか？」

俺が尋ねると、彼女は少し顔を赤らめながら頷いた。この反応を見るかぎりでは、きっと知っているのだろう。

「ええ、聞いたわ。まったく、とんでもない試験を考えるわね」

そう言いつつ、目を細めて俺を見る。あらま。これは、発案者が俺だってことを、誰かから聞いているな。誤解されるのも嫌だから、何か言い訳しなくちゃな。

「とんでもないか、確かにその通りだ。だがな、結局は男と女が一

緒に冒険すれば、遅かれ早かれそういう関係になっちまうんだ。中には騙したり、無理やりっていうこともあるだろう。それと比べりゃ、俺達は正直でいいと思うけどな」

よく聞く話だが、恋人がいない女が冒険者になった場合、いずれは仲間の誰かにレイプされる。最初のうちは優しくしておいて油断させ、抵抗出来ない状況になった時にいきなり襲い掛かるという手口が多いようだ。

そんなのと比べれば、入団時に心構えをさせておく我がエリオ団の方式は、良心的だと思うんだが。

「まあ、確かにそういう理屈も成り立つわね」

「だよな。で、入団試験の相手に、俺を選ぶっていうのはどうだ」

俺が彼女に軽く誘いをかけると、邪魔者が現れた。

「やめといた方がいいですよ。カインはヤルだけやったら、後は知らん振りですからね。しかも、女の気持ちなんて全然理解しないで、とにかくヤリまくるんですよ。本当に、サイテーです」

モニカめ、俺に何か恨みでもあるのか。俺は絶対にやめた方がいいと、熱心にヘルガに説いている。それを聞いたトマスは喜び、ヘルガはモニカの話を聞いてドン引きしてる。

まずいな。やっぱりモニカは俺のことを恨んでいたのか。やっぱ、1週間ヤリまくったのはまずかったかな。しかも、これで当分女を抱けないと思ったんで、好き放題しちゃったからな。

モニカの奴、何回腰を抜かしたっけ。それなのに、俺は気付かないフリをしてヤリまくったんだよな。1週間経った時には、魂が抜けたようにぐったりとしていたっけ。その後もしばらくモニカは寝込んだんだよな。

まずいな、こうして思い出すとかなり酷いことをしてるな、俺は。こんな話をヘルガに知られたら、かなり不利になるじゃないか。

その後俺は、なんとかヘルガの気を引こうとして頑張った。武具や防具の話をしたり、魔法の話をして、とにかく彼女の気を引いた。そうして、どうにか最後には彼女と仲良く話せるようにまでなった。自分としては、なんとかトマスと五分五分にまで持ち込めたと思っている。

彼女は一晩考えたうえで、明日に特別試験を受けるかどうか、受ける場合相手を誰にするのかを決めることになる。彼女が選ぶのは、果たして俺か、それともトマスか。また、もう一人の女が選ぶのは、果たしてエリオかアントニウスか。

全ては、明日に決まる。

第7話　北方の国々

残念なことに、ヘルガが選んだのはトマスだった。そのことを告げられた時、トマスが浮かべた満面の笑みを、俺は当分の間忘れることができないだろう。奴は、初めて素人の娘を相手にするんだからな。舞い上がるのも当然だろう。

だが、それ以上に驚いたことがあった。ネリーが選んだのは、有り得ないことに俺だったのだ。なんでも同じ魔法使いだからという理由で、俺を選んだという。俺は内心では小躍りしそうなほど喜んでいながら、彼女にはエリオの好意を足蹴にしてけしからんという冷たい態度で臨むことにした。

そうして俺は、彼女と三日三晩ヤリまくった。彼女は冒険者に向いていない気がしたんで、わざと嫌われるようなことをして団を辞めてもらうと思い、肉体の限界に迫るハードプレイや娼婦でさえも泣いて嫌がるような淫らなプレイを絶え間なく続けたんだ。それこそ、僅かな時間も寝かさずに。

三日後、憔悴したうえに腰を抜かした彼女は、全裸で大の字になってぐったりとしていた。体力の限界を超えて肉体を酷使したから、指一つ動かすことも難しかったはず。だから泣きじゃくったりはしなかったが、嗚咽を漏らしながら静かに涙を流していた。初体験がレイプよりも酷かったんだから、泣かないはずがないわな。

既に目の焦点が合っていない彼女に、俺は言い放った。冒険者になれば、更に酷くて辛い目に遭うだろう。これ位で泣くようじゃ、冒

険者失格だ。もっと酷い目に遭っても、笑い話に出来るようにならないと冒険者にはなれない。悪いことは言わないから、全てを忘れて国へ帰れと。その方が、お前にとって幸せだと。

俺の言葉に彼女は全く反応しなかったが、俺には分かっていた。冒険者に憧れを抱いていたこの女は、過酷な現実を知って見事に心が折れたに違いない。だから、もう二度とこの女に会うことはないだろうと。

さんざんヤリまくって睡眠不足に陥っていた俺は、それから急に眠くなった。そこで、彼女をその部屋に置いて自分の寝室に向かった。それと入れ違いに、エリオ達が彼女のいる部屋に入っていったが、それは俺にとってはどうでもいいことだった。

それから俺は、丸一日眠り続けた。どうやら、思った以上に体力を消耗していたようだ。女と3日ヤリまくったぐらいのことで体力を消耗するとは、我ながら情けないかぎりだ。上玉な素人女の初物が相手だからって、ちょっと頑張り過ぎたんだろうか。

そのことはとりあえず置いておくとして、旅の準備は全て終わったわけではない。しかも、その前に決めなければならないことがある。だから夜になって全員が集合すると、俺は行き先に関することを話し合おうと提案した。すると、すかさずエリオが渋い顔をする。

「カインのせいで、貴重な情報源がパーだ。どうしてくれる。ネリーは未だに目を覚まさないんだぞ」

恨みがましい目で、エリオが俺を見る。モニカも『ヤリ捨てるなんて鬼畜です』と呟いている。そういや、彼女はネウストリア王国生まれだと言っていたっけ。

しまったな。聞きたいことだけ聞いてから、ヤリ捨て……いや、試験をしても良かったな。まあ、今更何を言っても手遅れだからしょうがないが、一応謝っておくか。

「悪かったな。だがな、あいつは駄目だ。冒険者としての覚悟が無い。あのまま一緒に旅をしていたら、あいつも死ぬし俺達も危険な目に遭いかねない。俺はそう思っている」

俺がいつになく真剣な表情で言うと、思い当たる節があったのか、エリオは反論してこなかった。そこでこれ幸いと、ヘルガに話を振って強引に話題を変えようとした。

「俺達は、これから魔王軍をこの目で直に見るために東方へ行こうと思っている。ただ、どのように行くかはまだ決まっていない。近道を行くか、それとも遠回りをしてゆっくり行くのか。それを判断する材料として、ヘルガの話を聞きたいんだが、協力してくれるな」

俺の頼みに、ヘルガはしっかりと頷いた。他の仲間も聞く気満々のようだ。うん、どうやら上手く俺の失敗を追及されずにすみそうだ。俺が笑みを浮かべていると、ヘルガはゆっくりと話し始めた。

「それじゃあ、北方の国々について基本的なことから話すわよ。今私達がいる属州ナルボネンシスの北には、２つの国があるわ。西からゴート王国とネウストリア王国ね。ネウストリア王国南部の東側と属州ラエティアの西に接しているのがブルグント王国。更にその

東にあり、属州ラエティアの北に接しているのがアラマンニ王国よ。で、ネウストリア王国中部と北部の東側に接しているのがベルギカ王国で、更にその東にあるのがアウストラシア王国よ。ここまではいいかしら」

彼女は、簡単な図面を書きながら説明してくれた。うん、やはり言葉で聞くと良く分からないが、図があると分かりやすいな。その場のみんなが頷いている。

「この中で、ネウストリア王国とベルギカ王国、それにアウストラシア王国は、元は一つの国だったわ。それが相続によって国が分割されたのよ、１００年以上前のことだと言われているけど。その後、何度か統合と分割を繰り返して、現在に至っているの。それで今のネウストリア王国とベルギカ王国の王様は同一人物で、アウストラシア王とは腹違いの兄弟よ」

ほおっ、統合と分割を繰り返す国か。統合されれば力を増すだろうけど、分割されると国力は弱くなるだろうな。

「アウストラシア王国よりも東の地は、一部の例外を除いて国と呼べるようなものはなくて、大小様々な部族が住んでいるわ。そして、今挙げた国は、国土の一部又は全部が元は帝国だったの。それが魔族との戦いに兵士を提供することを条件に、帝国の一部を与えられて建国を許されたという訳よ。他に同じような条件で建国された国が西に２つ、東に２つあるわ」

なるほどね。辺境の国土と引き換えに兵士を得たと言う訳か。辺境を防衛する兵士はいらなくなるし、新たな兵士は得られるし、妙案だな。人間は、こういう知恵が回るから恐ろしいな。

「もっとも、アラマンニ王国の東に接している国は例外だわ。サモ帝国といって、帝国やその友好国とは仲が悪いの。ただ、私の知っていることは数年前の状況だから、今は多少事情が変わっているかもしれないわ」

とまあ、こんな感じで俺達はヘルガから北にある国々の話を聞かせてもらったんだ。ちなみにゴート王国、ネウストリア王国、ベルギカ王国、アウストラシア王国は、国土の西又は北が海に面している。残念なことに、海の向こうの国についての情報は得られなかったが、大きな島があるらしい。

それから話し合って出した結論は、ここから帝国内の街道を通って東へ向かうこと。あえて国外を旅する利点が無かったからだ。冒険者の仕事も、帝国よりも多いとはないらしい。ならば、旅になれるまでは帝国内を通ろうということになったんだ。おおむね3か月くらいあれば、魔王領との国境にたどり着けそうだという。

それから魔王軍の実態を見て、出来れば接近して直に見てから北に向かう。とりあえずはサモ帝国を避けアラマンニ王国を通り、アウストラシア王国に向かうことにした。それから東に行くか西に向かうか、決めることにしたんだ。おそらく、半年以内には着くことができるらしい。

そして、最も重要なことも決まった。エリオ団の正式な結成は、1週間後。その日、俺達はここから旅立つんだ。

人間の勇者としての俺の輝かしい歴史は、その日から始まるんだ。

第7話　北方の国々（後書き）

ネリーは、安易にカインを選んだことで酷い目に遭いました。カインは、彼女の幸せのためと言いつつ、本音はヤリ捨るつもりのようです。

エリオ団は当面の目的が決まり、正式な団結成まであと僅か。これからカインの冒険が始まります。

第8話　出発前夜

旅立ちの日を明日に控えた夜、俺たちは祝いの宴を催していた。テーブルの上に所狭しと並べられた豪勢な料理の数々や上等な酒を前にして、俺たちは楽しく飲み食いしていた。そうしてみんなが程よく酔ってきた頃、俺から重大な発表を行った。

「みんな、ちょっと聞いてくれ。俺たちは、明日旅立つ。苦難に満ちた旅になるだろうが、魔族を帝国から追い払う第一歩となる、人類の歴史に残る素晴らしい旅でもある。そこで万全を期すために、団員の役割をここで明確にしておきたい。これから発表するので、良く聞いて欲しい」

俺がみんなを見渡すと、真剣な表情で俺を見つめている。約1名を除いてだが。

「最初は、団長のエリオ。戦闘時には、前衛で戦闘の指揮を執ってもらう。移動時においては、行動の指揮を執ってもらう。町では交渉事全般を任せる。最も重要な役割だが、頑張って欲しい」

俺が言い終わると、エリオは大きく頷く。

「ああ、任せてくれ」

そう言って、胸を張る。彼のがっしりとした身体からは、頼もしさを感じる。そう、エリオならばこの旅を成功に導いてくれるのではないか、そう期待してしまう。

「次は、副団長のアントニウス。戦闘時には、前衛の後ろで戦闘指揮の補佐をしてもらう。移動時においては、周辺の警戒に当たってもらう。町ではエリオの補佐をしてもらう。かなり重要な役割だが、頑張って欲しい」

「ああ、請け負った」

アントニウスは、控えめに頷く。こいつは、相変わらずスリムな体型をしてやがる。エルフって、なんでこんなにスリムな奴が多いんだろうか。ちょっと羨ましいかも。

「次は、トマス。戦闘時には、前衛で戦ってもらう。移動時においては、馬車を統率してもらう。町では団員の安全確保を任せる。これも重要な役割だから、頑張って欲しい」

トマスは、何も言わずに頷くことで同意を示す。こいつは、身体がでかい割には無口なのな。まあ、しっかり働くからいいけれど。

「次は、シモネッタ。戦闘時には、前衛の後ろで戦ってもらう。移動時においては、団長の補佐をしてもらう。町では宿の確保を任せる。地味な役割だが、頑張って欲しい」

「ああ、分かった」

シモネッタは、意味ありげな視線を俺に向ける。どうやら、移動時にエリオの補佐をするという意味に気がついたようだ。要は、二人で一緒にいてもいいってことだ。恋人達に対する、ささやかな気遣いってわけだ。

「次は、モニカ。戦闘時には、後衛で援護をしてもらう。移動時に

おいては、俺の補佐をしてもらう。町では武器や食料の確保を任せる。これも地味な役割だが、頑張って欲しい」

「はい、分かりました」

モニカは、しっかりと頷く。こいつは俺に惚れているから、移動時は俺とペアを組むことにした。俺にとっても、男と顔を突き合わせるよりも、女と一緒にいる方が心が安らぐだろうしな。

「次は、ヘルガ。戦闘時には、奇襲や伏兵など臨機応変に戦ってもらう。移動時においては、トマスの補佐をしてもらう。町では情報収集を任せる。困難な役割だが、頑張って欲しい」

「ええ、分かりました」

ヘルガは、自信ありげに頷く。実際に戦ってみないとなんとも言えないが、なんとなく頼もしい感じがするな。こいつの働きいかんによっては、戦闘が楽になるだろう。実は、結構期待していたりする。

「次は俺だ。戦闘時には、後衛で援護をする。移動時においては、後ろの馬車を御す。町では武器や食料の確保を担当する」

そこでいったん言葉を止めると、約1名がおそるおそる質問した。

「あの〜、私の役割は無いんでしょうか」

声をする方向をみんなが一斉に見る。そこでは、全裸の――とはいえ手で胸や股間を隠してはいた――女が泣きそうな顔をしていた。

「ん、お前はまだいたのか。それになんで全裸なんだ？お前は露出

狂か。それとも裸に自信があって、どうしてもみんなに見て欲しいのか」

俺が意地悪く質問すると、隣に座っているモニカが脇腹をつねりやがった。そして『どうせカインの命令でしょ』などと小声で言う。まあ、正にその通りなんだが。だが、そんなやり取りには気付かずに、裸女は答える。

「私が裸なのは、エリオ団にどうしても入団したいという熱意を示すためです。何度も入団試験をしていただいたにも係わらず、私の力不足で未だに認めてもらえないようですが、どうしても入団したいのです。どうか、もう一度機会を与えてください。今ここで、みんなの前で試験をしても構いません。お願いします」

そう。信じがたいことに、ネリーは未だに入団したいと言っているのだ。最初の試験後、数日寝込んだうえに呆然としていた彼女だったが、我に返ると再試験を申し出たのだ。

さすがに2回目は鬼畜なことは出来なくて、酷いことをした負い目もあって努めて優しく抱いたんだが、何を血迷ったのか彼女は感激して嬉し泣きしやがった。もう、ワケワカメ、じゃなくて訳が分からない。

彼女が言うには、俺は本当は優しい人だそうで。最初の試験の時は彼女のためを思って、心を鬼にして酷い仕打ちをしたんだと。2回目の試験で優しくした俺が、本来の俺なんだと。だからとってもいい人だって言うんだ。

でも俺は、こんな頭がイカレタ女なんて入団させたくない。で、何度かヤルことだけはやったが入団は認めず、どうしても入団したけ

れば宴会に全裸で来い、それも俺から言われたからではなく自分の意思だと言えと言ったんだ。

だが、まさか本当に来るとは思っていなかったんで驚いたぜ。こうなったら、奥の手を使うしかない。これで駄目なら諦めるしかないが。

「そこまで言うなら、仮入団を認めてもいい。ネリーの役割だが、戦闘時には、全裸になって敵の目を引き付ける囮になってもらう。移動時においては、体調が悪い者を全裸で看病して癒してもらう。町では交渉の場で色仕掛けをしたり、夜の宴会で芸を披露してもらう。具体的には全裸になって交渉したり、全裸で踊ったりしてもらう。それでいいなら、仮入団を認めよう」

俺がそう言い放つと、ネリーはおろか、他のみんなも固まってしまった。ようし、いいぞ。ここで駄目押しすれば、きっとネリーは入団を辞退するだろう。俺は、こんなこともあろうかと用意しておいたローブを取り出した。

「ネリーには、全裸のうえにこれを着てもらう。残念ながら、このセイレンローブは全裸で着なければ、真価を発揮しないと聞く。いやあ、ネリーに全裸になれだなんて、本当は言いたくないんだけど、そういう事情でしょうがないんだ」

俺が取り出したのは、セイレンローブ。上半身が人間の女性で、下半身が鳥の姿をしている海の怪物、セイレーンの羽根などで作ったローブだ。だが、普通のローブじゃない。全裸で着ないと魔法防御などの特別な効果が無くなるうえに、背中や手足しか覆わないんだ。つまり、これを着れば胸も股も丸見えになるという、全裸と殆ど変

わらないローブなんだ。いくらなんでも、こんなのを着るように言われれば、入団を諦めるだろう。

おや、ネリーの身体が震えている。やっぱり、こんなのを着るなんて嫌なんだろうな。他の団員も呆れているのか、呆然としている。まあいい。早く引導を渡してしまおう。俺が入団を諦めるように言おうと思ったら、ネリーが口を開いた。

「こ、これを本当に着ろというですか。この、セイレンローブを」

彼女は、声を震わせながら言う。よしよし、こいつはかなり怒っているな。こんなに声が震えるなんて、爆発寸前というやつかもな。

「ああ、そうだ。入団したら、これはネリーが着るんだ」

うん、そうだよ。入団したければ、これを着るんだよ。けど、こんな恥ずかしいのを着るなんて嫌だよね。だから、さっさと入団を諦めなよ。

「あ、ありがとうございます！私、カインの期待に応えられるよう頑張ります！」

そう、入団を辞……　ん、なんか話の流れがおかしくないか。

「えっ……」

「あの、今これを着てもいいですか？」

「あ、ああ」

あれれ。なんだかおかしいぞ。ネリーの奴、喜んでセイレンローブを着ているじゃないか。あっ、胸がプルンプルン揺れている。いや、そうじゃなくて、一体何が起きているんだ。

「ねえ、カイン。これ、似合いますか？」

いつの間にか、着替えは終わっていた。声のする方には、セイレンローブを着たネリーが。セイレンローブの大きな特徴である背中の翼が、ネリーをまるで天使であるかのように見せている。しかも、何故か翼に目が吸い寄せられて、胸の乳首や股の茂みが良く見えない。こ、これは、一体何が起きているんだ。

「これは凄い。これならば、囮効果は抜群だ」

アントニウスが感心している。うん、俺もだ。

「凄いです。これなら、ボクも欲しかったです」

モニカは、物欲しげな顔をしている。なんだと、冗談だろ。

「これが……セイレンローブなのか。一国の王女、それも処女を使い潰すほど陵辱出来るだけの対価を払ってさえも、なお買えないほど高いと聞いていたが。確かにそれだけの価値があるのかもしれないな」

あのお、シモネッタさん。何気に怖いことを言いますね。

「ああ、俺も聞いたことがある。故意でなければ王女が死んでも構わない、娼婦が狂うほどの陵辱を与えても、女として二度と使い物にならなくても構わないというアレだよな。それだけの価値がある

ものを、処女を失っただけで得られるなんて、ネリーは運がいい。いや、カインの気前がいいのか」

なんだと、エリオ。そんなに凄いものだったのか、このローブは。し、知らなかった。

「あの、カイン。これ、似合わないんでしょうか？」

おっと、俺はいつの間にか呆けていたんだ。しかも、ネリーは上目遣いで俺を見つめている。うわあ、なんて可愛いんだ。

「い、いや。思った以上に似合うよ」

「あ、ありがとうございます」

俺が答えると、彼女はさきほどまでの不安そうな顔が嘘のように、花開くような明るい笑顔を浮かべる。やばい、こんな状態が続けば悩殺されそうだ。何か言わないと、落ち着かないな。

「ふ、ふん。お前、もしかして俺に惚れたんじゃないか」

俺の軽口に、ネリーの顔は真っ赤になった。

「はい……」

そして、あり得ないことに肯定しやがった。おい、恥ずかしそうな顔をして俯くなよ。みんなも、微笑ましい笑顔になるんじゃない。あれ、モニカは機嫌が悪そうだ。実は、このローブが欲しかったからか。

うわ。ネリー、いきなり抱きつくなよ。ぎゅうっと抱きしめるな。俺の耳元で『愛しています』なんて言うんじゃない。『これから毎晩一緒に寝てください』なんて言われても困る。

うーん、人間の女って理解できん。わざと嫌われるように仕向けたのに、かえって好かれるなんて。もしかして、俺は人間というものを全く理解できていないのか。俺は、なんだか恐ろしくなった。

第8話　出発前夜（後書き）

今回、カインの思惑通りにはいきませんでした。
セイレンローブは高くても、カインにとっては材料は部下からもらえるのでタダ、加工賃もドワーフに命令すればいいのでタダですから、価値が分からなくてもしょうがないかもしれません。

登場人物紹介（前書き）

ネタバレ注意です。できれば８話まで読んでから見てください。

登場人物紹介

◎登場人物

■エリオ団のメンバー

●カイン　魔法使い・弓使い
主人公。魔王の息子だが、仲間には秘密にしている。
勇者になり、美しい姫かエルフ娘を嫁にして、一国の王になることを目指している。
召喚魔法を使う。

○モニカ　魔法使い・弓使い　ダークグリーンの眼　コルシカ出身
スリムな体型。シモネッタよりは背が低い。胸は大きい。
人見知りする性格だが慣れるとよくしゃべる。顔は上の下で可愛い。
装備：銀の杖、銀のボウガン、シルバーメイル、銀の帽子
初体験の相手はカイン。

●アントニウス　剣士・魔法使い　１８歳？　北方出身
副団長。美形エルフ。スリムな体型だが、カインよりは背が低い。

○ネリー　伝道士　長い金髪　ネウストリア王国出身
スレンダーな体型。胸はモニカより大きい。顔は上の中で奇麗。
静かで大人しい良家の子女という印象だが、カイン曰く頭がイカレタ女。
神聖魔法を使う。
装備：セイレンローブ
初体験の相手はカイン。

●エリオ　槍戦士　金髪・ダークグリーンの眼　２０歳？　シキリア出身？
団長。背が高く、がっしりとした体格。よく笑う。
槍を持たせたら、敵無しとまで言われているほど強い槍戦士。
恋人はシモネッタ。

○シモネッタ　剣士　シキリア出身
アントニウスと同じ位背が高く筋肉質な体格。
さばけた性格で下ネタも平気。顔は中の上。
装備：銀の剣、銀の鎧、銀の盾、銀の兜を装備。
恋人はエリオ。

●トマス　剣士　茶髪・緑の眼　１９歳？　ナルボネンスィス出身？
筋肉質な体格。剣の腕は一流。
無口で不言実行の人で頼りになる。

○ヘルガ　曲芸士　金髪・ダークグリーンの眼　アウストラシア王国出身
筋肉質の体型。顔は中の上。
装備：ダガー
初体験の相手はトマス。

◎国家

□人間の国家

○ロマヌム帝国
マレノストルム海を囲むようにして成り立っていたが、魔王軍の侵攻を受けて以来、領土の縮小が続いている。２０年で領土の４割が失われている。属州にナルボネンスィス、交易都市にマッスィリアなど。人口は推定で５千万人以上。

○ゴート王国
属州ナルボネンスィスの北にある。帝国の一部を与えられて建国を許された。

○ネウストリア王国
属州ナルボネンスィスの北にある。帝国の一部を与えられて建国を許された。

○ベルギカ王国
ネウストリア王国中部と北部の東側に接している。帝国の一部を与えられて建国を許された。

○アウストラシア王国
ネウストリア王国の東にある。帝国の一部を与えられて建国を許された。

○ブルグント王国
ネウストリア王国南部の東側と属州ラエティアの西に接している。帝国の一部を与えられて建国を許された。

○アラマンニ王国
属州ラエティアの北に接している。帝国の一部を与えられて建国を許された。

●ドロス帝国
東の大国。人口は推定で5千万人以上。

●サモ帝国
アラマンニ王国の東にある。帝国やその友好国とは仲が悪い。

■魔族の国家

●魔王領
魔王が住み、魔王城がある。ロマヌム帝国とドロス帝国に接していた。大半を砂漠が占めていたが、１０年かけて緑に変わった。

●魔族領
魔王領以外の領土を指す。ここ２０年で領土は拡大している。

●表魔王子領
魔王領の2倍の島と、魔王領の2割程度の島。ロマヌム帝国やドロス帝国から遠く離れている。
妖魔族、魔人族、獣人族が住み、魔族と人間の混血も進む。

●裏魔王子領
大小４つの無人島。２つの島に、竜族、半獣族、亜人族、魔獣族、海獣族が住む。小さい方の２つの島に、魔人族、妖魔族、獣人族が住む。

●隠し魔王子領
人間の国を密かに支配下においている。

第9話　初めての実戦

旅立ちの日、すなわちエリオ団結成の日から4日が経った。俺たちは、2台の馬車を連ねてマッスィリアを海沿いの街道を東へと進んで、属州キサルピナの有数の交易都市、ゲヌアを一路目指していた。ゲヌアまでの道のりは、今のところ退屈で平和なものだった。

それというのも、のんびりと移動しているからだ。マッスィリアからゲヌアまでは、馬車で2日から5日の距離にある。馬を急がせたうえに、日中は休まず移動したら2日で着く。だが、休憩を多めに入れて1日の4分の1を移動に充て、そのうえゆっくり走ると5日はかかるのだ。

俺たちは、大きな町では必ず情報を集めることにしていたこともあって、1日の移動時間を更に減らしたので、6日ほどかかる予定だ。だから、ゲヌアまに到着するのは2日後になるだろう。

さて、俺は今何をしているかというと、昨夜は不寝番をしていたので、横になって寝ているところだ。むろん一人ではなくて、昨夜一緒に不寝番をしたモニカと身体を密着させて寝ている。俺が彼女を後ろから抱きしめるような形になっている。

当然ながら、俺の両手は彼女の胸をしっかりと掴んでおり、さきほど目を覚ましたときから軽く揉んでいるのだが、彼女は目を覚ます気配がない。うーん、暇だ。しょうがない。俺はもう一眠りすることにした。

再び目が覚めると、俺は無意識のうちに胸を揉んでいた。すると既に起きていたのか、モニカが反応する。

「んもー、やめてくださいよー」

だが、そんなのは無視だ。こいつは、心の底では喜んでいるからな。俺にはそれがわかる。だから、止めるとかえって彼女に悪い。

「俺は今起きたんだが、お前はいつ起きたんだ？」

俺がすっとぼけて聞くと、彼女は律儀に答える。

「ボクは、ついさっき目が覚めたんです。でも、カインに抱きしめられていたんで、起きられなかったんですよ」

おおっ、そりゃあ悪かったな。でも、こいつの胸は弾力があって揉み心地がいい。だから、いつまでも揉んでいたい気持ちになる。肌も滑らかだし、しばらくこの温もりを味わいたいな。

そう思っていたんだが、残念ながら俺の願いはかなわなかった。

「敵襲だっ！」

その叫び声を聞いて、俺は飛び起きた。

俺たちを襲ったのは、いわゆるはぐれ魔族というものだ。８人のオークが、手に棍棒や棒を持って襲って来たんだ。武器も貧相だが、防具は更にみすぼらしい。護衛のない商人であれば、襲撃は成功したかもしれない。だが、奴らにとって運が悪いことに、俺たちは冒険者だった。

「ネリー！時間を稼げ。それからヘルガ！敵をかく乱しろ」

エリオの声が聞こえる。早くも迎撃を始めたようだ。時間を稼ぐよう指示したということは、油断して防具を身に着けていなかった可能性がある。俺は急いで防具を身に着けると、馬車から飛び出した。

「カインだ。指示をくれ」

俺がエリオの背中に向かって言うと、奴は間髪入れずに叫ぶ。

「カイン、ボウガンで攻撃を」

「おう、任せとけ」

俺は、今にもヘルガに襲い掛かろうとしているオークに的を絞ると、すぐさま矢を放つ。矢は狙い違わず、オークの首に突き刺さる。

「ギョエッ！」

オークは、悲鳴をあげて倒れる。おそらく死んではいないだろうが、当分戦闘は無理だろう。これで７対７になった。

「よし、行くぞ。カイン、援護頼む」

戦闘態勢を整えたエリオは、トマスと並んで敵に向かって突っ込む。その斜め後ろにシモネッタとアントニウスが続く。

俺が次の獲物を探していると、ネリーがオークに押し倒されるのが見えた。だが、オークは武器を手放して、彼女の胸にむしゃぶりついている。どうやら彼女の命を奪うのではなく、レイプするつもりらしい。命の危険がないのなら、後回しにしても大丈夫だ。

俺は、ヘルガの背中から襲い掛かろうとしているオークに狙いを定め、静かに矢を放つ。

「ゲボッ！」

またもや命中、今度は腕だ。オークは、倒れて無様に転げまわる。これで7対6だ。するとその時、俺の背後から矢が放たれて別のオークに命中する。

「どう、ボクの腕は？」

自慢げにモニカが言うが、こいつの腕も相当なものだ。俺は近くの敵を狙ったんだが、こいつは一番遠くの敵を見事仕留めたんだからな。これで8対5。

「ギャッ」
「グポ」
「ゲッ」
「ギャッ」

叫び声のする方を見ると、エリオ達がそれぞれ1人のオークを切り伏せていた。これで8対1だな。すると、残るはネリーを襲っている奴だけだな。奴は今、ネリーの頭を掴んで股間に押し付けている。さて、奴が射精するのを待つとするか。そうすれば、楽に倒せるからな。

「グオッ」

俺が攻撃を見合わせていたら、オークの鼻先に炎が爆ぜた。召喚魔法だな。モニカの奴、我慢出来なかったのか。いや、楽に勝とうとしないのは、他の仲間も同じみたいだな。周囲からオークに突っ込んでいきやがった。

「グオーッ」

最後のオークが、絶叫をあげながら倒れていく。おそらくはオーク共のリーダーであろう奴が、絶命して果てた。アントニウスに左から首を突かれ、シモネッタに右から脇腹を突かれ、トマスの槍に背中から貫かれて。

だがな、もうちょっと考えてから攻撃した方が良かったと思うぞ。考え無しの攻撃をしたおかげで、ネリーの身体中にオークの返り血と精液がぶちまけられたからな。

ま、最後の詰めは誤ったが、エリオ団最初の実戦としては完璧だ。今夜は祝勝会でも開くかな。

第9話　初めての実戦（後書き）

初めての実戦は、完全勝利でした。
ネリーだけ、可哀想なことになりました。

第１０話　祝勝会

今夜は、思ったとおり祝勝会になった。こんなこともあろうかと用意しておいた少し上等な酒と、檻に入れて持って来た豚を提供したんだ。豚は３匹全部潰して、入れ替わりにオークを縛って押し込めた。魔族は死体よりも、生きている方が報酬が高いからだ。

ちなみに人間共は知らないことだが、捕らえられたはぐれ魔族は、最終的に俺の傘下にある商会が引き取ることになっている。それから秘密裏に魔王子領に送り込んで、俺の忠実な配下になるわけだ。人間に捕らえられて絶望した奴らを救い出した俺は、命の恩人ていう奴になるからな。俺に忠誠を誓うのは、当然だろう。

それからネリーだが、既に身体からオークの血や精液は洗い落としている。青ざめていた顔も、今では普段と変わらないように見える。あれだけ大量の返り血を浴びたら、もっと混乱していてもおかしくは無いんだがな。もしかしたら、口直しと称して俺の精液を飲んだのが良かったのかもしれない。

無理やり汚い肉棒を銜えさせられた女に同じことをするなんてと、さすがに俺は反対したんだがな。本人が同意したんで渋々しゃぶらせたんだが、結果的に正解だったようだ。人間の女とはなんとも理解しがたいものだ、ということがよく分かったのも収穫だな。

「ねえ、カイン。食事の準備が出来ましたよ。こっちに来てくださいよ～」

俺が野営地周囲に罠を仕掛け終わって物思いにふけっていると、モ

ニカからお呼びがかかった。豚の丸焼きの良いにおいがする。あれが今日のメインか。他には酒とシチューにパン。品数こそ少ないが、野営中であれば滅多に口に出来ない豪勢な食い物だ。

俺がみんなの輪に加わると、エリオが乾杯の音頭をとった。それを合図にみんなが飲み始め、今日の戦いを振り返る。

「今日は、カインの活躍が一番だな。オークを2匹仕留めたからな。さすが、弓の名手だ」

豪快に笑いながらエリオが俺を褒めるが、それは違うと俺は思う。

「次に活躍したのは、トマスじゃないか。私やアントニウスも斬りかかったが、最後のオークを仕留めたのはトマスだからな」

シモネッタは、エリオに寄り添いながらトマスを褒める。これも違うな。

「ああ、みんな頑張った。良くやったと思う」

そういうアントニウスは、少しはわかっているかもな。

「ボクも頑張りましたよ。だから、何かご褒美くださいよ。ねえ、カイン」

なんだ、モニカが俺に絡んできたぞ。ダークグリーンの眼が、なんだかぼやんとしているようだ。俺は仕方なく、褒美を与えることにした。

「しょうがねえな。ご褒美のディープキスだ」

「えっ、ち、ちが……」

モニカが何か言いかけたが、俺は無視して彼女の金髪を掴み、キスをかます。それから舌をねじ込んで、こねくり回した。

「ん、んんーっ……」

何を言いたいのか分からないが、おそらくは喜んでいるのだろう。そう判断した俺は、モニカの口の中を蹂躙する。だが、そこに物言いが入った。エリオからだ。

「あのなあ、カイン。こういう席でそれはやめろよな」

エリオが懇願するので、止む無く俺はモニカから口を離した。彼女はまだ頬が赤く、ぽーっとしている。どうやら喜んでもらえたようだな。

「まったく、カインはこれだからね。慣れているのか天然なのか、よくわからないね」

ん。何を言う、シモネ。それは褒めているのか貶しているのか、俺には分からないじゃないか。

「そうよね。でも、私より付き合いの長いみんなが分からないんじゃ、私が分からなくてもしょうがないわよね」

今度はヘルガか。なんだか、嫌な流れになってきたな。ちょっと話をそらすか。

「まあ、俺のことはいい。それよりも、みんなに言いたいことがある。今日、一番活躍したのは俺じゃない。ネリーだ」

俺の言葉を聞いて、それまで俯き加減だったネリーが驚いて顔を上げる。他のみんなも、驚いた表情を浮かべる。

「えっ。それって、どういうことですか？」

モニカも首を傾げる。しょうがねえな、教えてやるか。

「今日楽に勝てたのは、オークの親玉をネリーが引き付けていたからだ。さもなければ、態勢を整える前に一撃を食らっていただろう。そんなことになったら、あんなに楽には勝てなかったぞ。エリオの指揮も良かったが、ネリーの動きは更に良かった。良くやったな、ネリー」

俺がネリーを褒めると、彼女は真っ赤になった。

「あ、ありがとうございます。でも私、無我夢中で……」

「ならば、次からは狙ってやるんだな。敵の親玉か一番強い奴を瞬時に見分けて、そいつに的を絞って引き付けろ。それが出来れば、勝率はかなり上がるんだ。期待しているぞ、ネリー」

俺の言葉に、エリオとトマスが無言で頷く。シモネやヘルガもなるほどと呟く。モニカだけが首を傾げていて、アントニウスは反応がなかった。

「それじゃあ、今日の勝利を導いた功労者に乾杯しようじゃないか」

ネリーの健闘を称えるシモネの言葉に、みんなで乾杯した。

その日の晩、俺とネリーが不寝番を務めていた。モニカが代わろうかと言ってくれたが、ネリーは大丈夫だからと断ったんだ。

ちなみに、不寝番は晩から夜明けまで2人で務め、交替で起きていることになっている。周囲を見渡せるような高い場所から警戒することが多い。もっとも、そのおかげで風を受けて寒く感じることが多いんだがな。

それが理由なのか、モニカの奴が我がままを言い出して、身体をくっつけると暖かいからという理由で、俺がモニカを背中から抱きしめる形で不寝番をすることになった。俺としても彼女が寝ている間に胸を揉み放題なので、断る理由はなかった。

ところが、ネリーまでもが暖かいからという理由で、抱き合って不寝番をすることになった。ネリーの場合はモニカとは逆の体勢になるが、彼女を片手で支えながらもう片方の手で胸を揉んでいる。今も俺が起きている番なので、胸を揉んでいるわけなんだが。

「ねえ、カイン。少しお話ししてもいいですか」

突然、モニカが話しかけていた。

「ああ、いいぞ」

こいつはモニカと違って、起きている時に胸を揉むなと言わないからな。しかし、抱き合っているから彼女の顔は見えず、長い金髪が見えるのみだからちょっと話しにくいがな。

「さきほどはありがとうございました。私、一人前の冒険者として認められたようで、本当に嬉しかったです」

ふうん、そんなもんか。

「そうか、それは良かった。ま、これからも頑張れよ」

俺が励ますと、彼女はくすくす笑う。おかげで胸が揺れて、少し気持ちがいい。

「カインって、よく分からない人ですね。酷いことをするかと思えば、優しくしてくれたり。冷たいことを言うかと思えば、優しい言葉をかけてくれたり。なんだか、掴みどころのない人ですね」

ん？それって褒め言葉なのか、それとも違うのか。良く分からないな。

「そんなもんか。団のために必要とあらば酷いこともするし、助けたりもする。失敗すれば冷たくするし、成功すれば優しくもする。それが、そんなに掴みどころがないのかなあ」

俺が呟くと、彼女はなるほどと呟く。

「言われてみれば、そうかもしれませんね。今日だって、処女のままだったら泣いて逃げ回って死んでいたかもしれません。カインにヤリまくられたからこそ、オークに犯されそうになっても逃げずに

立ち向かえたんだと思います。そう考えると、入団試験は本当に必要だったんだなと、初めて理解出来ました」

「そっか。わかってくれたか」

なんてな。俺のくだらない言い訳を信じるなんて、バカじゃないかこいつ。

「はい。だから、お礼を言わせてもらいます。私を一人前の女にしていただいて、ありがとうございます。私、初めての男がカインで本当に良かったと思います。ですから、これからも私の下半身を鍛えていただきたいのですが」

「というと？」

もしかして、性的な意味で鍛えるのか。まさかな。

「出来るだけ、私と一緒に寝てください。それに、気の向いた時だけでいいんです。カインのせ、精液を、私の胎内に放って欲しいのです」

「ま、気の向いた時だけならいいだろう」

な、なんと。これには流石に驚いた。だが、悪い話ではないな。好きなときにヤリまくっていいということじゃないか。こいつは頭がイカレタ女ではあるが、奇麗だし胸は大きいからな。性欲解消に、この身体を好きなように使ってやろうじゃないか。

「まあ、嬉しい。ありがとうございます」

「だが、分かっていると思うが、街中以外では駄目だぞ」

魔族や盗賊が現れるかもしれない場所では、性行為は禁止しているからな。攻撃を受けた時に合体してると、膣痙攣なんてことになりかねないからな。女だと、腰を抜かすかもしれないし。安全な場所でないと、怖くて合体出来ないからな。

「ええ、分かってます」

そう言うと、彼女は俺にぎゅっと抱きついた。こういう時は、胸が大きいっていいもんだよな。

第１１話　ゲヌア（前書き）

今回は、お下劣な話があります。嫌な方は回れ右することをお勧めします。

第11話　ゲヌア

オーク達と戦った後は、拍子抜けするくらい何も起きなかった。おかげで、俺たちは無事ゲヌアに着くことが出来た。ゲヌアは帝国内でも栄えている港で、街は豊かで人も多い。ここで数日休んで、情報収集と食料などの確保を行うことになるだろう。

宿は、シモネッタが探し出した。安宿ではなくて、中の上くらいの宿だ。良い宿だと、貴族や金持ち商人しか止まることが出来ない。だから俺たち冒険者にとっては、これが泊まることが出来る中で最も上等な宿になるんだ。

「さあて、宿が決まったから、後は別行動になるな」

俺の呟きに、エリオは頷く。

「そうだな。俺とアントニウスは、この都市のギルドにあいさつしてくる。トマスとシモネッタは、この宿で待機して何かあったら対応してもらう。カインとモニカは武器や食料の確保を頼む。ヘルガは情報収集を頼む。ネリーはそうだな、ヘルガの手伝いをしてもらおうか。みんな、異存は無いな」

エリオの言葉に、みんな黙って頷いた。

宿を出た俺とモニカは、馬車に乗ってこの都市で一番大きい商会に向かった。もちろん、俺の息がかかった商会だ。だから値切り交渉などはしないで済むし、好きな物を購入出来る。だが、そんなことは知らないモニカは不安そうだ。

「ねえ、カイン。ボクたち、ちゃんと食料や武器を買えますかねえ。ちょっと心配だったりして」

いつにない弱音を聞いた俺は、彼女をからかう。

「その点は大丈夫だ。交渉が上手くいかなかったら、女をあてがえばいいんだ。それで大抵の交渉は上手くいくさ」

俺の説明を聞いたモニカは、俺の言葉に裏があることに気付かず、安心したようだ。

「なあんだ。女をあてがえばいいんですか。確かに、それなら上手くいき……」

彼女の言葉が、不意に途切れた。

「あのー、カイン。もしかして、あてがう女ってネリーなんですか」

バカか、こいつは。そんなわけがないだろう。もしそうだったら、あいつを連れてくるだろうに。

「残念、ハズレ」

俺はその時、思いっきり爽やかな笑顔を浮かべた。それとは対照的

に、彼女の顔が引きつっていく。

「あの、ちょっと知りたいんですけど。あてがわれた女って、どうなっちゃうんでしょうか」

くっくっく。なんだか面白くなってきたな。もっとからかってやるか。

「はあ？決まってるだろうが。特別試験は、こういう時のためにやっているんだ。まあ、少なくとも三日三晩はヤリまくりだな。大丈夫、お前なら余裕だ。なんといっても、１週間ヤリまくっても平気だったんだからな」

などとのたまいつつ、にっこり微笑む俺。一方、モニカは今にも泣きそうだ。

「あの、出来れば遠慮したいんですけど。駄目ですか？」

おお、目に涙を浮かべてやがる。俺は、彼女に更なるイタズラを仕掛けることにした。

商会に着いた俺たちは、応接室に通された。そこは華美ではないけれど、上品な調度品がさりげなく置かれた落ち着きのある部屋だった。そこでソファに座って少し待つと、男が２人現れた。一人は上品な感じのスマートな年配の男で、もう一人は小太りで風采のあがらない男だ。

「初めまして。俺たちは、帝国でも有数の冒険者グループである、エリオ団の団員です。俺はカインで、こいつはモニカといいます。よろしくお願いします」

俺が立ち上がって右手を差し出すと、彼らも手を出してきた。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

「ほう、帝国有数ですか。頼もしいですな」

俺は、彼らと固い握手を交わす。その時、突然大声を出す奴がいた。

「ト、トイレはどこですか。う、うんちが漏れそうです。ああ、うんちが、うんちが、うんちがぶりぶり漏れちゃいますうっ！ケツの穴から、うんちがあふれそうですっ！」

いきなり叫んだのは、モニカだった。

「おお、それは大変ですね。どうぞこちらへ」

小太りな方の男が、モニカを気遣ってトイレへと案内する。ぎゃははっ。モニカの奴、本当にやりやがった。まさか俺の冗談に引っかかるとは、信じられねえ。うんちを連発すれば幻滅されて、相手にされなくなるだろうという俺の嘘を真に受けて、本当に実行しやがったんだ。これは、今晩のいい肴になるな。

だが、それだけじゃない。モニカがいない間に、魔族であるこの男と秘密の情報交換をするために、この茶番を仕組んだんだ。俺の目論見は成功し、この男に秘密の文書を渡すことが出来た。

「これを頼む」

俺は、何通かの手紙を男に差し出した。それは、俺の配下達に向けて送る手紙だ。中身は、まあ色々だ。

「ええ、確かに」

魔族の男は、静かに微笑んだ。

その日の晩、楽しい宴会の席だというのに、モニカは大荒れだった。

「カ、カインは意地悪ですっ！」

モニカは、まぶたに涙を浮かべながら抗議するが、俺は大笑い。

「いやあ、まさか本気にするとは思わなかったんだ。悪かったな」

俺は笑いながら謝ったが、彼女の機嫌が直るはずもない。頬を膨らませて、真っ赤な顔をして怒っている。そんな彼女を横目にしてワインを飲むが、俺に対する攻撃は止まなかった。

「まったく、カインもほどほどにしておけよな」

エリオは呆れ、横にいるシモネッタも俺に非難の目を向けている。俺は騙された方が悪いと言いたいが、女に対して正論は通じないようなのでそんなことは言わない。

「私も、カインのしたことは酷いと思います」

ネリーも、俺を冷たい目で見る。おいおい、お前は俺のことが好きなんだろ。そんな目で見るなよな。

「しょうがねえな。それじゃ、モニカの機嫌が直るまで、今晩は可愛がってやろうか」

俺は、モニカの胸を掴んで揉んだ。こいつの胸は、揉み心地がいいから好きだぜ。

「んもー、カインのすけべ。ボクの胸を揉まないでくださいよー」

モニカは口を尖らせて抗議するが、実力行使には出ない。それもそのはず。こいつは、内心では喜んでいるんだからな。

「ん、そんなに嫌か。だったら、ネリーの胸でも揉むかな」

そう呟くと、モニカは黙ってしまう。そこですかさずモニカの胸を揉みまくると、今度は何も言わない。うん、やっぱりそうだ。こいつは、俺に胸を揉んでもらうのが嬉しいんだ。俺はモニカを抱き寄せると、後ろから抱きついて彼女の胸を堪能した。

ようし、今日はモニカは一緒に寝るとするか。

第１２話　ラオディケイア（前書き）

今回カインは、仲間と離れて行動します。

第12話　ラオディケイア

今朝の目覚めは、まあまあだった。モニカの胸を十分堪能したからな。えっ、モニカが嫌がらなかったのかって。もちろん、何も言わずに俺に胸を揉まれるがままになっていたぜ。もっとも、俺が昨晩存分に可愛がったからっていうのもあるだろうけどな。

話は逸れるが、俺はどちらかというと胸は小さいほうが好きなんだ。女の胸なんて、手の中にすっぽり納まるくらいの大きさがちょうどいい。それを優しく揉みほぐしていき、少しずつ大きくしていくのがたまらなく好きだ。欲を言えば、ヘルガの胸を一回り――もしくは二回り――小さくしたくらいの大きさがいいかな。

とはいえ、大きいのが嫌いってわけでもない。モニカのように、滑らかですべすべの肌っていうのもいい。手に馴染むような感じで触り心地がいいから、いくら揉んでも飽きないんだ。だから俺は、暇さえあればモニカの胸を揉むようにしている。

「んもー、もうやめてくださいよ。これ以上揉むと、ボクだって怒っちゃいますよ～」

モニカの奴、寝言からすると夢の中で俺に胸をもまれているらしい。夢っていうのは、本人が望んでいるものを見るらしい。それからすると、やっぱりモニカは俺に胸を揉んで欲しいようだな。まあ、いい。こいつはしばらく起きそうにないから、置いていくか。

俺が食堂に行くと、既に仲間達は食べ始めていた。パンにスープ、それにサラダが朝食のメニューらしい。みんなが同じものを食べて

いるということは、メニューは一つしかないってことかな。

「おはよう」

俺が仲間に声をかけると、エリオがにやりと笑う。

「おい、モニカはどうしたんだ。腰でも抜かしたか？」

そう言った後で顔をしかめていた。おそらく、シモネッタに腹でもつねられたんだろう。こいつらだって昨日は久々に激しくヤリまくっただろうから、人のことは言えないはずだがな。

「まあ、近いな。ヤリ過ぎでダウンしている」

おそらくモニカは、昼過ぎまで起きないだろう。同じくヤリまくったであろうシモネッタとヘルガは、平気な顔をしているんだけどな。モニカは鍛え方が足りないということかな。

「それじゃあ、商会に行くのはカインだけか。誰か一緒に連れて行くか？」

エリオに聞かれて、俺は首を振る。必要な食料や武器の手配は昨日で終わっているからな。今日行くのは、野暮用だ。それも、仲間達には来て欲しくない類のものだ。だからモニカをわざわざダウンさせたし、他の女が来たいと言わないようにと、昨日はあえてモニカにいたずらを仕掛けたんだ。

「なら、さっき話した通りだね。私とエリオ、トマスとヘルガ、アントニウスとネリーが手分けして情報収集ってことでいいね」

シモネッタの言葉に、全員が頷く。ネリーが不満そうな顔をしていたが、俺は気付かないフリをした。ちなみに、昨夜はエリオとシモネッタが同室で、トマスとヘルガも同室だ。この2組は、もちろんヤリまくっているはずだ。アントニウスとネリーも同室だが、こいつらは何もしていないだろう。

俺は、昨日とは別の商会に向かった。俺は商会ごとに別の顔を用意しているんで、一つの商会では用が終わらないことがある。面倒だが、俺が魔王の息子であることを知られないためには、この方法がいいと思う。人間はもちろんのこと、魔族にも知られたくないからな。

俺はフードを深く被り、顔が見えないようにしてから――もちろん変装したうえでだが――目当ての商会を訪れた。それから魔族を見つけて声をかけ、魔族にだけに通じる合図をしてから召喚の魔法陣を使わせてもらった。召喚の魔方陣は、物や人を呼び出すだけでなく逆も出来る。俺はここの魔法陣から俺専用の場所にある魔法陣まで跳び、そこから更に目的地へと跳んだ。

俺が向かったのは、２０年も前に魔王領になったラオディケイアという港湾都市だ。約１００年前と約１５０年前に起きた大地震によって荒廃していたが、隠し魔王領に近いという理由から俺が優先して再建させたことから、とりわけ俺の息がかかっている都市だ。

他の新魔王領にある都市と同じく、この都市の都市長は魔族で副都市長は人間だ。そして、実際に都市を運営しているのは、未だに人

間の方だ。人間の方が圧倒的に数が多いからな。細かいことを言うと内政全般は人間が担当し、軍事のみ魔族が担当している。

俺は、ここの都市長の家――というより、屋敷か――に向かった。部下や使用人を含めて１００人以上は住んでいるので、当然ながらかなり大きな屋敷だ。大きな屋敷が立ち並ぶ高級住宅街の中でも、一際大きい屋敷だ。

都市長は、ゼルという魔人の男だ。魔人といっても色々いるが、彼は人間からは吸血鬼と言われるタイプだ。もっとも、彼が吸うのは人間の精であり、実際には血を吸うことはない。彼やその仲間が精を吸っているところを人間から見ると、血を吸っているように見えることから吸血鬼と呼ばれるようになったらしい。

彼には魔人の正妻と人間の側室がいる。側室には人間の夫がいて、その夫にはワーウルフの正妻がいる。ちょっとややこしいが、魔王領以外の魔族領では、この家族構成――２夫３妻制――が一般的だ。

この家族の特徴としては、魔族の夫は昼間は魔族の妻と一緒に過ごすが、夜は人間の妻と子作りに励むことが挙げられる。人間の夫は、昼は仕事をして夜は魔族の妻と子作りに励む。結果として、ハーフの子が出来やすくなるんだ。

貴族など上流階級に属する人間の妻は、人間の夫と結婚して１週間以内に魔族の側室にならなければならない。その１週間の間に人間の夫と子作りに成功しなければ、彼女は以後人間の子を産まないことが多い。人間の子を産まない女は、割合でいうと５割を超えるらしい。それでいて、魔族の子を平均して３～４人産むそうだ。

2夫3妻で生まれる子供だが、平均して魔族の子は2人、ハーフは7人、人間は1人だそうだ。都市長の家庭でいうと、魔人妻の子が魔人3人、人間妻の子がハーフ4人と人間1人、ワーウルフの子がハーフ7人だったはず。親が5人に子供が15人という大家族である。

「いやあ、久しぶりだね。どうだいカイロス、元気にしてたかな」

ゼルは会うなり俺を歓待し、酒を酌み交わしながら色々と俺の知りたいことを教えてくれた。暮らしが豊かであること、魔族のハーフが順調に増えていること、そのためか魔族と人間の仲は表面上は良好であること、都市の運営も順調であること、などである。俺は質問が終わると、幾つかお願い事をした。無論、彼は快く引き受けてくれた。

「そういや、クララ様の機嫌はどうなんだ」

俺がこの近辺を統括している将軍の名前を出すと、彼は笑顔で答えた。

「相変わらずかな。無難に兵士達をまとめているようだ。あまり戦いが好きな人ではないようだし、様々な行事に顔を出しているようだが、機嫌は上々らしいよ」

彼はそう言ったが、戦いが好きでないというのは事実と異なる。クララは血を見るのが大好きだが、それを周りの者には隠している。

戦闘狂ではなくて、謀略を好むタイプなので傍目には分かりにくいが。しかし、事実を言っても得るものは無いので、俺はあえてそのことは黙っていた。

クララは、地域軍司令官であり、魔剣士団長でもある。

地域軍というのは、魔王軍に４つしかない大軍団のことだ。シュリア地域軍、パルテア地域軍、サルマト地域軍、アエギュ地域軍があり、それぞれ４０万から５０万の兵力を有している。

魔剣士団長というのは、魔王子軍を含む魔王軍が誇る５大団長のうちの一人だ。他に竜騎士団長、獣戦士団長、妖魔兵団長、超魔竜団長がいる。このうち、超魔竜団長以外は地域軍司令官でもある。彼らは魔王軍の尖兵であり、魔王軍を勝利に導いているのだ。

ちなみに、５大団長全員が俺の忠実な部下である。そして、俺は彼らの部下という別の顔も持っている。カイロスというのは、クララの部下としての名前で、クララの勢力圏で行動する時にはこの名前を使っているんだ。

「そうか。最近クララ様には会っていないからな。近々顔を出しておくか。まあ、それはそれとして、お前に重大な話がある。この分だと、５年後ないし１０年後に魔王軍は敗北する。５年後には、いつでもここから逃げ出せるようにした方がいいぞ」

俺の忠告に、ゼルは固まった。うーん、ちょっと刺激が強すぎる話題だったかな。

第１２話　ラオディケイア（後書き）

帝国内ではカインを名乗っている主人公ですが、魔族領内では様々な偽名を使っているようです。カイロス以外にも、多くの名前を使っているようです。

第１３話　歓迎の宴

夜は、俺を歓迎する宴となった。ゼルとその家族２０人が勢揃いするかと思ったが、そうではなかった。俺もすっかり忘れていたが、魔族の子供は他の魔属領に留学する制度があるんだ。成人した子もいるし。それで子供の半分以上はここにいないようだ。

魔人の長男は魔王都に留学していて、魔人のハーフは上２人が他都市に留学中。人間の子は結婚して家を出ている。ワーウルフのハーフは１０年で成人して家を出るから、上から４人がいない。子供で家に残っているのは魔人２人、ハーフ魔人２人、ハーフワーウルフ３人の計７人だった。

「まあ、カイロス様。お元気ですか？」

ワインを注ぎながら微笑んでいるのは、ゼルの人間妻――側室――であるラウラだ。彼女は魔王軍がこの都市を攻め落としたときの、人間で一番偉い奴の娘だった。そいつは結局魔族に従うことになり、娘を魔族に差し出したんだ。その時彼女は１６歳だったので、今は３６歳になっているはずだが、見た目は２０代後半にしか見えない。

「貴女はいつまでも若くて美しいですね。ゼルが羨ましいですよ」

俺は彼女を褒めたが、彼女の笑顔に良い意味での変化は無かった。

「まあ、お上手ですこと。でも最近は、夫に相手にもされませんのよ。マルコは、ワーウルフの妻に夢中ですわ。ゼル様はお情けで私の相手をしてくださるからいいですけれど、まともにゼル様を取り合ったら魔人の女性にはかないませんわ」

彼女の視線の先には、ゼルの妻がいた。６０歳を越えているはずだが、外見は２０代半ばに見える。これでは、人間の女が羨むのも無理ないか。

だが、魔人の女に嫉妬するということは、ラウラがゼルに対して好意を持っているということに他ならない。少なくともこの家では、魔族と人間はそこそこうまくやっている――少なくともいがみ合っていない――ようだな。

「魔族による支配は人間にとっては面白くないでしょうが、貴女みたいに魔族に協力していただける方が多いと助かります。強制的に魔族の子を産まされる貴女のような淑女の犠牲によって、仮初かもしれませんが平和と繁栄が保たれているのですから」

こんなシステムを考え出した自分が言うのもなんだが、人間の女は好きでもない魔族に種付けされて大勢子供を産まされるんだから哀れだな。そんな俺の考えを否定するかのように、彼女は首を振る。

「私も最初のうちは、正直言って魔族の方を恨みました。ですが、今は感謝すらしています。ゼル様は、人間と魔族を差別しない尊敬できるお方ですし。大勢の子供に囲まれ、魔族の子供達にも慕われて、今の私は幸せです」

そして、彼女はロマヌム帝国と比較して、魔族の方が支配者として

は好ましいと指摘した。

帝国は戦争の敗者には厳しく当たり、負けた都市の住民の中には奴隷として売り払われて悲惨な境遇に陥った者も多いという。そのうえ支配地からは凄まじい搾取をするので、奴隷にされなくても悲惨な生活を過ごすことになるというのだ。彼女は最悪家族諸共死罪、良くても奴隷になることは覚悟したという。

ところが、彼女の父は死罪どころか副都市長になったうえ、若い魔族の娘を側室にと与えられて喜んだそうだ。彼女自身も政略結婚の駒にされるところを、好きな男と結婚することが出来た。

唯一にして最大の不満は、好きな男がいつしか魔族の女に本気で惚れてしまって、今では自分よりも魔族の女に深い愛情を注ぐようになったことだという。そんな夫に愛想を尽かしそうになり、彼女も今では夫よりもゼル方を愛しているという。

「そ、それは、なんと言えばいいのか……」

俺は、言葉に詰まった。こういう時は、一体なんと言えばいいのだろう。肯定すればいいのか、否定した方がいいのか、迷うところだ。

「いいんですよ。それに、結構多いんですよ、私みたいに魔族の夫の方が好きだっていう女は」

彼女はそう言って微笑む。うーん、これは事実なのかお世辞なのか、本気で分からないな。だがまあ、お世辞にもこんなことが言えないよりはマシなのだろう。そこで、俺はふとある少女のことを思い出した。

「そういえば、あの娘は元気にしてるかな」

俺が呟くように言うと、彼女は目を細めて笑う。

「もうじき、分かりますよ。噂をすれば、ほら……」

彼女が口を開くや否や、ばたばたと足音が聞こえてきた。その足音は段々こちらに近づいてきて、食堂の入口でピタリと止まる。

「ねえ、カイロスはどこなの～」

その声の主は笑顔の似合う快活な、１０人に聞けば１０人が美しいと言うであろう１２歳の美少女で、俺の現地妻候補の一人だ。細面の顔に大きくてぱっちりとした目をしていて、整った鼻筋に可愛らしい唇をしている。俺はこんな彫刻のように奇麗で整った顔立ちの少女には、今まで会ったことはない。

彼女とは、数年前に偶然出会った。一目で気に入った俺は、彼女の親と交渉して彼女を俺の婚約者にすることを認めさせた。今はまだ本気で結婚する気はないが、他の男に取られないようにするためだ。実はここに来たのも、彼女に会うためというのが大きい。

彼女は俺の趣味に合わせて、金髪を腰まで長く伸ばしている。肌は白く滑らかで、手足はすらりとして細長く、スタイルは同年代の娘と比べて華奢で細い。胸はやや膨らんでいるという微妙な大きさで、これから発展する可能性大だ。仮に大きくならなくても、俺は小さな胸も好きだから全然問題ない。

「おおい、ここだぞ～」

俺は思わず笑顔がこぼれつつ、彼女に向かって手を振る。すると彼女は満面の笑顔を浮かべて、こちらに走ってくる。

「うわぁい、カイロスだ～」

彼女は走った勢いそのままに、俺に抱きついてくる。エメラルドグリーンの瞳が近づいてきて、俺の頬に可愛くちゅっとしてきた。うーん、なんて可愛いんだ。俺は思わず彼女を抱きしめながら頬ずりしていた。

「久しぶりだな、サラ。元気にしてたか」

彼女の頬は、すべすべしていて気持ちいい。いつまでもこうして頬ずりしていたいが、人目があるのでそうもいかないのが残念だ。

「うん、元気だよ～。いい子にしてたよ～。カイロスも元気そうだね～」

彼女は、太陽のようにまぶしい笑顔を浮かべている。うーん、癒されるな。この笑顔を見ただけでも、ここに来た甲斐があったというものだ。

「サラはね、カイロス様に会うのを楽しみにしていたんですよ。是非、旅の話をしてやってくださいな」

ラウラが旅の話をするように言うと、他の子供たちも目を輝かせながら寄って来た。

「僕もカイロス様のお話を聞きたいです」

「私にも聞かせてください」

「私もお願いします」

気付けば、魔人2人、ハーフ魔人2人、ハーフワーウルフ3人と、子供が全員集まってきていた。上は13歳から下は3歳まで年齢はバラバラだ。男女は半々というところか。サラはラウラの姪ということもあって、ここの子供達とも仲がいい。だから断る理由は無いだろう。

俺も大人相手に話をするよりも、子供相手に話をするのが好きなので、子供達の要望に応えることにした。俺はゼルに断りを入れて場所を変えた。顔を突き合わせて話をするため、絨毯がある場所で輪になって座る。

こういう時、サラの指定席は俺の膝の上だ。彼女を後ろから抱きしめると、弾力性に富んだお尻の感触が俺の股間を刺激する。俺は誰にも気付かれないように彼女の内股を触りながら、旅の出来事を面白可笑しく話して、子供達を喜ばせた。

さすがにオークを倒した話はしなかったが、その後で部下がオークの女子供を救い出したことを、さも自分が経験したかのように話すことにした。他にもエリオ団の仲間から聞いた冒険譚を、さも自分が経験したかのように話して、子供達の興味を一心に集めることに成功した。

夜も更けてくると、子供たちはお休みの時間だ。俺は切りのいいところで話を終わらせて、サラと一緒に風呂に入った。彼女の頭を丁寧に洗い、続いて身体中をくまなく洗って一緒に湯船に浸かる。う

ーん、風呂っていうのは気持ちがいいな。

俺はサラの胸が成長するように、丁寧にマッサージする。彼女からはなんだかくすぐったいと言われるが、慣れているためか嫌がる素振りは見せない。これは、なんといっても至福の時だ。ネリーはもちろんのこと、モニカの胸を揉む時よりも嬉しいんだ。

風呂から出ると、使用人の女がサラの頭をタオルで拭いて乾かす。彼女の身体を拭くのは、俺の役目だ。念入りに丁寧に、宝石を磨くような気持ちで彼女の身体を拭く。この頃には、サラはうつらうつらとしてくる。

だが、ここで眠られては困るので、彼女の頬をぷにぷにと軽くつまんで寝かさないようにする。柔らかいほっぺたが可愛いな。いつまでもこうしていたくなるが、彼女が風邪をひくと困るのでそれは出来ない。

彼女の頭が乾くと、抱き上げて寝室へと運ぶ。それからは、彼女と楽しいひと時を過ごす。彼女とは、会話をしながらキスをしたりお互いの身体を触ったり抱き合ったりと、まるで幼い恋人同士のようにソフトな行為しかしない。

それでも俺は満足している。彼女の滑らかな肌は、いくら触っても飽きないからだ。彼女の身体はまだ幼いので、身体に大きな負担をかける種付け行為はしない。彼女が１７歳、いや１６歳になるまではしないつもりだ。

しばらくすると、彼女は疲れて深い眠りに就く。それからは大人の時間だ。俺は彼女をベッドに残すと、服を着てゼルやラウラ達のところへ向かう。

そこで俺は、ラウラにも魔族が将来ロマヌム帝国に負けるであろう話をするつもりだ。その時彼女がどのような行動をとるのか、サラはどうするつもりなのか、近いうちに決断するよう求めるつもりだ。

その結果がどう出るのか、それによって俺の計画が少なからぬ影響を受ける可能性があるので、俺はラウラ達の決断がどうなるのか、なるべく早く知りたかった。だが、その決断に少なくとも半年、もしかしたら1年以上かかるかもしれないという予感が俺にはあった。

第１３話　歓迎の宴（後書き）

◎登場人物・・・魔王領・魔族領編

●魔王
カインの父親　魔王都在住

●魔王子　魔王都出身
カインの正体。魔軍総司令　仮面で素顔を隠している。
カイロスなどの偽名を使う。

○サラ　人間　長い金髪・エメラルドグリーンの眼　１２歳　ラオディケイア在住
カイロスの婚約者。ラウラの姪。スレンダーな体型で胸は小さい。
顔は上の上で奇麗。
細面の顔に大きくてぱっちりとした目、整った鼻筋に可愛らしい唇。

●ゼル　魔人　ラオディケイア在住
ラオディケイア都市長
魔人の妻との間に子供が３人、ラウラとの間に子供が４人いる。

○ゼルの妻　魔人　６０歳超　ラオディケイア在住
ゼルとの間に子供が３人いる。

○ラウラ　人間　３６歳　ラオディケイア在住
ゼルの側室。ゼルとの間に子供が４人、マルコとの間に子供が１人いる。
前副都市長の娘、現服都市長の妹。

●マルコ　人間　ラオディケイア在住
ラウラの夫。ラウラとの間に子供が1人、ワーウルフの妻との間に子供が7人いる。

○クララ　魔人　シュリア地域在住
シュリア地域軍司令官、魔剣士団長、魔王子の配下、カイロスの上司

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4593x/

魔王の息子だが、勇者になる！

2012年1月11日07時46分発行